この空の下

小田原アキラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
この空の下

【Ｎコード】
Ｎ０７２３Ａ

【作者名】
小田原アキラ

【あらすじ】
入学式の日、わけもわからず絡まれて、ヤンキーな四人と友情を育むことになった僕。高校生活をするうちにある女子生徒に恋するが、それは裕の三つ子の姉だった。そこからはじまる三つ子との奇妙な関係。

1、ヤンキー四人衆

その受験は最悪だった。

どう最悪かというと、僕は高熱を出していたにも関わらず、地元高校一本だけを受けてしまった為に、インフルエンザとも知らずその受験に挑んだのだ。終わった頃には、自分によくやったといい聞かせていたのを覚えている。熱のおかげで暖房のきかない教室ではなく、暖かいストーブの近くで試験を受けれたコトは他よりラッキーではあったと思う。

結果は見事に合格。とはいっても、一般だから普通にやりゃ落ちる方が珍しい気もするが。とにかく、その瞬間から僕は高校生になったわけだ。

そして春、暖かな風のふく季節。僕の側にもその風はきていた。

憧れていた、というか早く楽になりたいがために、入学式の風景を何度もえがいたことがあった。入学式は中学校の時と似ていて、特に校長の話の長さはいい勝負だと思う。周りの奴の反応も似ているし、先生の顔も年齢層も似たようなもんだ。ただ、生徒数が倍になったぐらいだろうか。もうひとつ、髪の色もカラフルだ。服装もばらつきあるし。

ふと自分のクラスメイトを見た。

根暗そうな奴もいれば、中学の時から知ってる奴もいる。僕が苦手とするだろう、派手な奴らだっているし、服装をピシッと決めてる奴もいる。女の子も同じようなもんだ、派手な奴も、暗い奴も、男子と同じ数だけ同じようにいる。僕はいったいどのグループに組み分けされるコトになるんだろう。できれば、どちらにもはいりたくない。

教壇の下に生徒指導の先生がマイクを片手に学校における注意事項を述べていた。ざわつく体育館の中でどれだけの人間がその声を

真剣に聞いてるのだろう。まっすぐに前を見ている生徒も、ほとんど耳から耳へと聞き流していると思う。僕がそうだから自信持ってそうだといえる。他の奴はしゃべってるか、携帯電話をいじるか、器用な奴は立ったまま寝ているし、見ているこっちが笑ってしまいそうなことをしてる奴もいる。

「ははっ・・・」

堪えきれず、ざわめきの中に僕の笑い声が混じった。すぐに恥ずかしくなって口もとを押さえて咳をしたふりをしながら周りの様子をうかがう。だが、誰も僕に気を止めることはなかった。当たり前だ。僕は何者でもなく、ただの一生徒であって、ここにいる誰とも変わらない存在だからだ。特に目立つわけでもなく、特に僕だけが出来るものがあるわけでもなく、平凡で何にも面白くないやつだ。

そう思うとさっきまで笑っていたことが恥ずかしいと思う自分の方がおかしく思えた。

そう、僕は何者でもない。誰の目にとまることなく、ただ時間に流されていきていくだけの人間。

ポンと軽く肩を叩く音が聞こえた。振り向くとやたら嬉しそうにニタニタ笑う顔があった。男子である事は一目瞭然だが、茶色の髪に両耳合わせて5個はあいてるピアスが僕の心を凍らせた。イジメか？いきまり目を付けられるなんてついていない。先生の話はつづいているのに、そいつは話を聞く気のない側の人間なのか、僕の方をつかんでこっち来いよとジェスチャーした。

「まだ話続いてるけど？」

僕はリンチがイヤで抵抗したが怯む様子はない。

「そんなの誰も聞いてないだろ？もっち、お前も」

僕は前を向いて、先生に注意されるのがいやだったから誰とも話さない気でいた。そりゃ、話は全く耳にはいってなかってけど、人に言われるとなんかなぁ。

「こっち来いよ。そんなとこ突っ立てるより楽しいぞ」

それは君たちだけね。リンチがそんなにしたいなら、こんな公衆の面前じゃなくてもいいのに。強引に腕を引っ張られ、非力な僕はそのまま彼の立っている場所まで連れ去られた。

彼が立っていた場所はずいぶん後ろの方で、そこには立っている女子生徒数名の陰に隠れるように三人の男子生徒がヤンキー座りをしてガン垂れていた。僕はリンチされるのは初めだし、ここは助けを呼んだ方がいいのかとかいろんなことを考えたが、とりあえず黙っていると、茶色の髪のやつが僕の背を押して三人の中央に立たせた。

すると、反射的なのか座っていたはずの三人が立ち上がり、僕の顔をじろじろ見始めた。その頃には僕の心はずいぶん落ちついて、来るならこいとか思っていたが、同時に痛いのはやだなぁと、呑気な事も考えていた。

「なぁお前、名前なんて言うんだ？」

三人のうちの一人、金髪野郎が急に聞いた。僕は声がうわずらない様に気をつけながら。

「水戸敦だけど」

「水戸？　水戸って水戸黄門と同じ水戸？」

今度は僕の後ろにいる茶髪が言った。変に驚いててなんか変な感じ。

「そうだけど」

「へぇ、おもろい名字。水戸っちどこ中？」

み、みとっち？なんだそれ、女の子じゃないんだから変なあだ名はつけないでほしい。が、そんなこと口から出せない。だって、狐みたいな目で頭はげてて一番目つき悪い奴だし。

「東中だけど」

「あ、まじでぇ！　オレその隣町の南中の畑山裕でーす。裕って呼べよ」

テンション高いなぁと思いつつ、引きつった笑顔をその茶髪に向けた。

「オレ同じ南中の盛岡健司、ケンちゃんでいいよ。オレは水戸っちってよぶからさ」
狐目は更に目を細めて、すでに目玉が見えない状態で笑っていた。
僕は気のない返事だけを返して少し笑った。
「はいはい！　オレはぁ、天山カズトでっす。好きに呼んでくれていいからね。ま、オレは水戸っちって呼ぶけどさ」
といって金髪野郎は手を差し出してきた。金出せってコトかと一瞬思ったが、こんなに笑顔でいるのにそんなコトいわれるわけないか。と、手を差し出して握手した。僕はともかく、金髪野郎の手にはめられた指輪がいたい。
「最後はオレかぁ、オレは美山薫。女っぽい名前だけど、オレは気に入ってるからそこんとこよろしく」
はははっと笑うと同じように長身男は笑った。髪は黒いのにピアスの数が半端ない。軟骨の所まであいていて痛そうだ。
ようやく気がついたが、僕はリンチされる為に連れて来られたようではなかった。ではなんで僕を？
「一番、あん中で目立つぐらい背ちっこいからさ、目についたというか。しかも、やたら顔キレイじゃん。珍しい奴もいるもんだなぁって話してたら、声聞きたくなったし。ま、これも何かの縁だろ。クラスも一緒だし仲良くしてくれよ、みとっち」
茶髪がいうと、周りから背中を強く叩かれた。それにしても、僕の顔がキレイってなんだよ、自分たちはどこかのテレビに出てくるアイドルみたいに女受けのいい顔してるくせに。と、いう言葉はのどの奥の方にとどめておいた。
やたらテンションが高くて、僕とは違う場所にいる四人が僕を呼んだことがなんだか気が抜ける程おかしなコトに思えて、ついに今まで堪えてきた笑いと一緒に吐き出してしまった。いきなり笑った僕に、たぶん引いたにちがいなかったけど、いつの間にか大爆笑になっていた。
僕の高校生活第一日目は、こんな大変なやつらと友情を育む所か

ら始まった。

1、ヤンキー四人衆（後書き）

もうひとつ作品を書いているのですが、いましばらくはこっちの方を進めていくつもりです。
もちろん、書ける限り両方進めていこうと思っていますが、どうぞ最後まで呼んでください。

2、桜並木

入学式から一週間が経った。

あの日から僕はしらない間に有名人になっていた。というのも、僕に話しかけてきたあの四人は知る人ぞ知る、地元では有名な不良だったらしい。クラスの中や、他クラスで仲良くなった奴から聞けば今はまだ、中身も外身もましな方だという。

それに絡まれる僕はもはやあの四人組の仲間だと思われているらしい。それが僕を有名にした原因だと思われる。確かに僕はあの四人と仲がいいが、僕自身は決してあんな性格でもないし、あんな格好はできない。それにあいつらみたいに、そこにいるだけで誰かが寄って来るような存在でもなく、目立つコトもない。

どうして僕なんだろう、あいつらと一緒にいるのは、なんで僕なんだ？

「だから言ってるだろ、みとっちの顔キレイだもん。結構目立つと思うけどな」

幸運にも窓際の席になった僕の隣の席に座っている茶髪の裕が、大きな溜め息と共に吐き出した。

「別にキレイじゃないよ。それに目立ってもいないし」

「水戸っちが眼鏡かけるからだろ？その眼鏡ちょっと大っきくないの？合ってないし」

うっさいなぁ、と僕が少し膨れると裕は面白い玩具を見つけた子供のように笑った。

「水戸っちってさぁ、どっかの国の血混じってるだろ？」

僕はドキッとした。そんなコトいう人を久ぶりだった。それに、眼鏡をかけてからは誰もそんなコトいわなくなっていたのに。

「なんでわかるの？」

「わかんじゃん、日本人の顔じゃないもんね。で、どこの血？」

「フランスだよ。うちのじいちゃんがフランス人なんだ」

裕は無意識にか口笛をふいた。その音はあまりにも大きく僕は一瞬だけクラスの注目を集めた。
「じゃ、水戸っちはクォーター？」
「そうだね、そうなるね」
すごいなぁっと、裕は妙に感心していた。それがどうすごいのか、僕がフランス人の血を受けついでるだけで別に話せるわけじゃない。もし話せるなら、少しは僕の取り柄っていうものになっていたかもしれないけど、残念なことにじいちゃんがたまに話すフランス語を理解するのも無理だ。
次の授業が始まると、裕は机に突っ伏して顔だけこっちに向けていた。
「寝るの？」
眠そうな目を無理矢理開けて、僕を見ると首を振った。首についているジャラジャラした物が机にあたって大きな音をたてた。
「窓、見てみろよ」
先生がこっちを見て注意しようとしてるのが見えた。でも僕は裕の言葉にしたがって窓の方に目を向けた。裕の目がどこかいい物を見つけたと言ってる気がしたからだ。外には薄ピンク色の桜並み木が見えた。風が吹いて桜が揺れると花びらが舞いはじめた。入学してから一週間経つけど、これをこんなにゆっくり見たのは今日が初めてだ。
僕は素直にきれいだと感じた。
僕は裕の方を見ると、すごいねと声を出さずに伝えたが、裕は笑ってるだけだった。
「水戸っち、弁当くいにこうぜ」
金髪のカズトが僕の肩をつかんで揺すった。
「はぁ、ここで食べないの？」
「桜キレイだから花見しようって。いくだろ？」
なるほど、授業中窓の外を見てたのはそんなことを考えてたから

か。
「いくよ」と僕は立ち上がった。
カズトと廊下に出ると薫がいた。薫は身長が高いので僕は少しだけ彼の顔を見るには見上げなければならなかった。あの四人の中では一番横に並びたくないと思っていたが、薫は僕の横にきて僕の頭に肘をのせるのが何故か気にいっていた。そして僕も、とくに嫌だという反応をしないから薫は今も乗せている。
「ちっさいよな、水戸っち」
肘をのせずに手のひらをのせて、髪をぐしゃぐしゃにしながら薫がいった。
「だよな。何センチなん？水戸っち」
僕は少しふくれて「１５４センチ」と答えると、二人は何故か納得した表情を浮かべていた。
僕の身長は高校生の１年男子における平均身長を大きく下回っている。いってしまうと、僕の身長は高校１年生女子の平均身長ぴったしなのだ。これは結構コンプレックスだけど、そのうち伸びるコトを信じているのでちびといわれても気にしない振りぐらいできる。
一階まで降りて桜並木の所にいくとすでにどこかから借りたブルーシートを桜の下にしいた、裕とケンちゃんがいた。何か楽しそうに話しているみたいだったけど、僕らが来るとすぐこっちに来いと大声で呼んだ。
薫とカズトが二人のとこに行く後ろに続いて歩きだしたとき、すっと甘い香りがした。
第二校舎へと続く渡り廊下の方を見ると、髪の長い女の子がじっと桜の方を見ていた。その顔に僕は見覚えがあったが、僕の視線に気づいた彼女が目をそらした為に覚えることはできなかった。
でも、確かに知っている顔だった。
「水戸っち！　早くこいって！」
僕は視線を戻してブルーシートに駆け寄った。
桜が舞って、ちらっと見た裕の顔が少しだけ記憶の片隅に引っか

かった。どこか何かにすっぽりとはまるように、地面に桜の花びらが落ちるように。

3、雨やどり

あれから僕は、何度も髪の長い女の子を見かけるようになった。
僕の教室から見下ろせばすぐに見える渡り廊下を彼女はよく通る。何故か友達はいないけど、たぶん移動教室か、別のクラスの子に会いにきているか、どちらかだろう。これは気にしているのではなく、たぶん目につくだけだと思う。見たいと思ってもいないのに視界の隅に入ることってあると思う。僕の場合彼女がそうなだけだ。
見かける彼女の顔も、誰かに似ていると思った理由が僕はやっと分かった。それは、丁度僕の隣の席で数学の時間から一時間ぐらい、寝続けている裕だ。見れば見る程よく似てる、彼女の方が目が大きくて、肌の色が白けど。
もちろん僕は裕にそのコトを話してみた。けど、裕は何も答えず話を流されてしまった。あまり人に話したくないコトなのか、僕には言いたくないコトかと思ってもう一度聞く気にはどうしてもなれなかった。それは中学からの経験から来てるのかもしれない。僕は仲がいいと思っていた友達の多くに相談事だけはされたコトがなかった。相談事ではなく、その悩みが解消してから最後に聞かされる。その時に僕は悟った。結局、ただ話すのに都合のいい奴なだけで、悩みを聞いてもらうには不都合なやつだと。
今となってはあきらめているので、裕の態度もそんなに気にしてはいない。
その日は雨が降っていた。それでも、僕が窓を見下ろせば渡り廊下には彼女の姿があった。後ろ姿だけど、なんだか寂しそうに丸くなった背中が見える。
「ちょっと、みとっち！　次カード引く番」
「あ、ごめん」
僕は慌てて窓から目を離した。
僕の机と後ろの女子の机、それから裕の机を合わせて何故かババ

抜きをしている。雨が降っているというコトで花見ができなくなり、彼等は暇つぶしの為にたまたま誰かが持っていたカードを借りてババ抜きをはじめているわけだ。

「雨なんて最悪だよな」

ケンちゃんが残り一枚のカードをうちわ代わりにして言った。

「だな、このままじゃ桜散っちまうよ」

吐き捨てるように言ってから、薫はカードを捨てる。

「げっ」カズトの声がひびいた。「いや、何でもない」

そう言うが、薫の顔が妙に笑っていてバレバレだった。おかげで裕の顔が少し曇る。

その場に少しだけの緊張が走った、裕がどのカードを選ぶかでこのゲームに勝つのが誰か決まる。裕もカードは一枚だけだ。カズトが持っているのは三枚のカード。裕が手を伸ばしてカードをつかんだ、まだカズトの表情は変わらない。だが、裕が別のカードをつかむと少しだけ頬を引きつらせた。それによって裕はカードを決めたのか、最初につかんだカードを選んだ。

「うっわ、最悪。カズトにやられた」

結局そのババ抜きで勝ったのはケンちゃんだった。

帰りになって僕は傘を持ってきてないコトに気づいた。裕はバイトがあるからとすぐに教室を出て行ったし、ケンちゃんは細い目を細めながら何も言わずに出て行った。たぶん彼女と帰るかなんかだろう。薫はバンドを組んでるらしく、その仲間と練習しに行くと言っていた。で、残ったのが僕とカズト。

カズトは傘を持っていたけど僕が少し残ると言と一緒に残ってくれたのだ。

「オレさ、気になってたんだけど水戸っち、気になってる子とかいる？」

その言葉に何故か長い髪の女の子の顔が浮かんだけど、無理矢理消した。

「いないよ。なんで？」
「いや、なんとなく。そうだ、裕から聞いたけど水戸っちクォーターなんだって？」
「うん、まぁ、そうだけど」
「さっすが、だからそんなにキレイなんだな」
さすがって、なにが？という言葉は呑み込んだ。
「カズトこそ、気になってる子いないの？」
カズトはふっふっふ、と変な笑いをした後に耳打ちしてきた。「いるよ」ていう、短くてちいさな声だったけどはっきりと聞こえた。
別に驚く事ではなかっただろうけど、僕は少し目を大きくした。そしてそのままカズトを見ると少し頬が赤くなっていた。何より、そんなこと簡単に僕に教えていいのだろうか？というのが一番驚いたかもしれない。
「俺の話聞く？聞きたい？」
カズトは少し照れているみたいだ、たぶんテンションもあがってるからすごく話したくなってるんだと思う。僕はもちろんうなずいた。
「俺が好きなやつは、ここの学校にはいないんだけどめっちゃカワイイやつなのよ。いつ知り合ったかというと、オレんちラーメン屋なんだけど、そこでバイトに来たとこから始まったわけ。ちなみに一個年上よ。まだまだつき合ってはいないけど、俺はめちゃ好きだし、絶対両思いにしてやろうって思ってる」
なんか熱く語られてこっちまで顔が赤くなる。
「そのうちさ、オレんち遊びにこいよ。水戸っち紹介するし。あ、でも間違っても惚れるなよ」
惚れないよ。と笑うと、カズトは満足そうに笑った。そして僕も、そうやって話してもらったのは初めてだったからすごく嬉しくて笑った。カズトがすごく頑張ってる事がうらやましく思えた。
僕も恋をしたことがあった。ただあれを恋というのかどうか、僕には判断しかねる。

ただ、僕は今でも彼女の面影をおいかけていて、彼女以上の人が現れないということが僕の新たな恋をせき止めている。あの頃の僕は、今よりずっと心がひねくれていて、ちびだった。だから、僕を救ってくれた初めの人は彼女だった。今はもう、会う事はできないけど。

「なぁ、そろそろ帰らない？傘ならパクってけばいいじゃん」

僕は言葉に従った。パクるというのではなく、借りるコトで雨はしのげるし教室にはいくつか傘が残っている。ずっとおいたままなのもあれば、部活中の子がおいて行ったのもある。まぁ、明日返せばいいわけ出し。と僕は一つ借りた。

ぱらぱらした細かい雨が空から降って来るのが今日は不思議とキレイにみえた。

カズトは僕の隣で傘を開くとさっさと下駄箱からの階段を降りて、水たまりにはまっていた。慌てるその姿を見て僕は思わず笑ってしまった。ふて腐れるように水をけるカズトは、僕の方を見て少しだけ目を大きくした。

僕ではない所を見ているので、僕は振り向いてカズトの視線の先を探した。

「あ・・・」

声はちいさくて聞こえていないと思う。けど、そこにいる長い髪の女の子は僕の方を見た。

「裕子じゃん」

と言ったのは、まだ水たまりに足を反分つけたままのカズトだった。それに気づいた彼女はカズトをみて、みるみるうちに笑顔をつくった。

「かっちゃん！久ぶり」

カズトは階段を登り、彼女の前に立って握手をした。傘は水たまりにつかっている。

僕は何がなんだか分からずに、二人を見ているとカズトが僕の腕

を引っ張った。
「裕子、こいつ水戸っち。オレらの高校最初の友達」
彼女は笑顔をつくって僕に頭を下げた。僕もつられて同じコトをした。
「で、水戸っち。こちら裕の三つ子の姉ちゃんで裕子」
僕は一瞬、世界が止まった気がした。裕子という彼女が、裕の血縁者ではあることはなんとなく予想していたけど、まさか三つ子とは・・・。双児までなら見た子とあるけど、三つ子は初めて聞いたし、本当にいるんだとか、そんなコトを考えてしまった。
「み、三つ子・・・」
僕のつぶやきは、昔話に盛り上がる二人の声にかき消された。

4、裕の事情

三つ子かぁ、三つ子でも一卵性とかあるんだなぁ、と僕は裕を見ながら思った。昨夜見た彼女ははっきりと裕の顔と一致する。もうこれは血縁者じゃないとは言えないだろう。

でも裕子さんとわかれたあと、カズトが僕に言った言葉が胸の奥に引っかかる。

『裕は今家出してるんだ。というより、もうこれは別居って感じかな。裕の家庭の事情ってやつはオレらもしらないから、あんまりつっつかない様にしてやってくれよ』

家を出てる。って僕には想像つかない。僕には家族がイヤになったコトも、家族が邪魔になったこともないからだろうけど、裕の気持ちを分かることはできるのではないかと思った。でも、それが甘い考えだってことはすぐに分かった。

その日の僕は、昨日の雨以上に最悪な気分の裕に拍車をかけてしまった。それは、裕子さんのコトを口に出したからだった。

「水戸っち、それすっごいおせっかい。何かキレた、オレ帰るわ」

なんでそうなったのか、授業中にも関わらず裕は鞄を持ってさっさと教室をあとにした。その後を僕は授業中ということを理由にしておいかける事はできなかったけど、僕の代わりにケンちゃんが後を追った。先生もあとを追って行くのが見えたけど、すぐに戻ってきた。

教室内は僕の心のように、騒然としていたその中で僕は動悸が激しくなっていくのを感じた。昔の記憶が少しづつ僕の心の黒い闇をつっついて、見たくないものが次々と目に浮かぶ。

僕はまた孤独になっていくのを感じていた。

ケンちゃんが戻ってくると僕の背中をポンとたたいて、気にするなと僕に言ってくれた。カズトや薫も同じように僕に気を遣ってく

れたけど、僕はこのままだと僕の回りに友達がいなくなって行く気がしてすごく怖くなっていた。
僕はどうしようもない人間で、気にしていると知っていたことも簡単に口に出してしまう、最抵な奴だ。誰かが励ます言葉さえも、今だけのただの気休めにすぎないんだと感じてしまっているし、気にするなという言葉で安心さえできない。僕は何者でもない、ちっぽけな人間だから、僕から人が離れていくのは簡単なコトだと思った。
「な、携帯で連絡してみなよ？」
ケンちゃんも薫もカズトもそれを進めたけど僕は首を横に振った。
「ごめん、僕もってないんだ。携帯電話」
それに連絡先もしらない。携帯を持っていないコトを告げると驚く顔が見えた。やっぱしおかしいのだろうか、高校生にもなって携帯を持っていないことは。別に家が貧乏なわけじゃない、僕が携帯からでる電磁波を嫌うせいなんだけど、その他にも電話や、顔の見えないままで会話することがきらいだからだ。
とにかく、ここは僕が謝らないとだめなんだ。そう口に出すとケンちゃんが裕のバイト先を教えてくれた。

僕は昨日の雨で花びらのほとんど散ってしまった桜の所に来た。
あっけないと思った。あれだけ満開に咲き、人の心に美しいと思わせていた桜がすでに姿を変えて、美しいとはとても思えない姿になっていた。地面に散った桜の花びらは、踏みつぶされた花びらよりもひどい色に変わって、あの頃の薄ピンク色のキレイな姿はなかった。
桜の側から離れたとき、渡り廊下の所に裕子さんがいた。やっぱり良くここを通るんだなぁと思っていると彼女は桜の方を見た。僕は一瞬どきっとしたけど、僕の方を見てないコトがそれを止めた。でも、彼女はすぐに僕に気づいて手を振った。
「水戸っちくんだよね？　なんでそんなとこにいるの？　裕達は？」

彼女はゆっくり僕の方に近付きながら、あの四人を探していた。もう放課後なので、裕以外は昨日と同じような理由で帰ってる。カズトは今日は家の手伝いをしなければならないらしい。
彼女は裕のコトは知らないんだろうけど、僕は言うべきなんだろうか。僕が考え事をして無言になっていると彼女は答えられないならいいんだけどね。と言ってくれた。
「いや、別に答えられない分けじゃないけど。もう、みんな帰っただけだよ」
「あ、そうなの。なんか、水戸っちくんってあいつらとつるんでる感じしないよね。でも、悪い奴じゃないから仲良くしてやってよ」
少し照れたように彼女は笑った。そして僕の肩をばんばん何度も叩くので僕は体をよろけさしてしまった。おかげで眼鏡が少しずれてあやうく外れるところだ。
彼女は僕より少し身長が高かった。なんだか女子に負けてるってコトが無償にいやだった。
「あ、水戸っちくんさ、顔キレイだね。ちょっと眼鏡外してみてよ」
やっぱり裕とは血が通ってるよ。おんなじこと言うんだから。
「それはちょっと、
「なんで？　いいじゃんちょっと見るだけだからさ」
言うとすぐに僕の前で手を合わせた。そんなに見たいものなのか？と僕は思ったが、そこまで言うならと、溜め息まじりに眼鏡を外した。すると彼女はちいさい悲鳴をあげて僕の顔をつかんだ。
「うっわ、キレイな目！ちょっと青いんだね」
顔が近くて僕は赤くなっていくのを感じた。彼女もしばらく僕の目を見てからすぐ、頬を赤くしながら僕をはなしてくれた。まだどきどきしてる胸をなでながら、僕は眼鏡をかけた。
「クォーターなんだ。目だけはじいちゃんからの遺伝。だからちょっとだけ視力弱いんだ」
「そうなの、いいなぁ。そんなにキレイな目。うらやましいよ」
うらやましい？なんで、目がキレイなぐらいで？こんなのカラー

コンタクトでもつければ青くなるもんじゃないのか。
「ね、あたしも水戸っちって呼んでもいい？　あたしのコト裕子って呼んでくれてかまわないからさ」
「うん、構わないよ」
彼女は嬉しそうに「やった」と言った。僕なんかでそんなに嬉しがるのは珍しいうえに、ちょっとひく。
「ひとつ聞きたいことあったんだけど・・・」
「なに？」
「裕は・・・元気そう？　最近帰ってこないから、心配なんだけど、さ」
彼女はうつむいて、僕に背を向けた。そしてその辺に転がっていた石をけった。
「うん、元気・・・といっても、僕が今日怒らせちゃったからどうかな」
「怒らせた？　裕を？」彼女はやたら驚いていた。「な、殴られたりしなかった？」
今度は僕が驚いた。
「いや、怒って帰っちゃったけど・・・他は何も？」
「・・・本当に。そうなんだ、よかった。やっぱり裕も成長したんだ」
成長した？僕はその時にあの噂を思い出した。中学のときより、今の方がだいぶましだってこと。なるほど、きっと彼等は裕子が知っている限りではキレると人を殴ったりしていたんだろう。でも、今は違うコトに驚いている。
「じゃぁ、僕はこれで。裕に謝りにいかないとならないんで」
「え、待って！　裕の住んでるとこ知ってるの？」
彼女は僕の方に顔を向けた。僕が頷くと彼女は顔を明るくさせて、「あたしも行きたい」と言った。僕は裕を心配する彼女の気持ちを汲み取って別にいいと返事をした。

裕のバイト先はちいさな喫茶店だった。たぶん皿洗いなどの仕事を任されているんだと思うけど、すこしイメージと違った。中に入るとすぐに、中年の女の人が席を案内してくれた。
ついつい場の雰囲気に流されてそのまま席に座ってしまった。店内の方も狭いといえるほどちいさくて、僕らの他にお客さんは2人くらいだろうか。なんで、こんなとこに裕ははたらいているんだろう。
「ご注文の方は？」
「あ、すいません。畑山裕はこちらにいらっしゃいますか？」
彼女が聞いた。中年女はちょっと待ってね、と言ってすぐにカウンターの奥に行った。次戻ってきたときは、エプロンをつけて少し汚れた服をきた裕だった。僕に気づいて気まずそうにこっちに来たが、裕子のコトに気づき顔を強張らせていた。
「・・・ど、どうした？」
裕は僕の方だけをむいて少し、照れくさそうに言った。もう怒っていないコトが分かって僕は安心して笑った。
「あの、謝りにきたんだけど」
「え、あ、なんで？　悪いのはオレの方じゃん。今日考えてたんだけど、水戸っちはオレのコト考えて言ってくれてたわけだし、勝手に怒って出て行ったのはオレじゃん。わるかったよ、気にさせて・・・」
「ううん、そんなことといいんだ。僕こそ、気に触るコトいってごめん」
僕と裕は顔を見合わせて照れて笑った。なんだかこんな風に誰かに謝ったコトなかったから、すっきりした。こんな気持ちは初めてだ。裕は僕の方に腕を回した。
「水戸っちやっぱいい奴。よっし、オレがなんかおごってやるよ！
何か頼め」
「あ、なら裕子も」
裕はその言葉に反応して裕子の方をむいた。裕子はさっきは裕以

上に気まずさを感じていた。そのせいで、顔が固まってるコトが分かる。
「・・・なんだよ、お前は何しにきたわけ？」
冷たい言い方だった。僕の時の態度とはまったくちがう。裕子はその態度にもひるまず、裕を睨んだ。
「元気にしてるか見にきただけよ。今どうしてるの？」
「べつに。関係ねぇだろ」
僕は冷や汗がすっと頭からつま先にまで駆けていくのを感じてた。
「ひどいいい方。私だけじゃなくて、徹も心配してるよ」
裕はその言葉に酷く反応した。僕の方から表情は読みとれないが、裕は裕子の手をとり無理矢理立たせた。
「お前帰れ！　二度とくんな！」
そういうとすぐに裕子は店を飛び出した。僕が見る限りでは、すごく泣きそうな顔してた。
僕は出て行ってほっとした、という顔をした裕の前をさっそうとすり抜けて彼女の後を追った。どうしてそんなコトをしたのか、そのときの僕にも理解不能だった。
裕が僕の後を少しだけ追ってきて、「放っとけ」と、「待てよ」という言葉だけはっきりと聞こえたけど、僕には彼女の後ろ姿しか見えなかった。

5、瞳からの記憶

彼女は僕の姿を見ると、ある方向を指差した。そこはファーストフード店だった。

中にはいって、僕は飲み物だけ頼むと彼女はお腹がすいているのかポテトを頼んだ。席に着くと僕は彼女の目に浮かんでいた涙を思い出していた。今はないが、さっきはそれが見えた。

「よかったね。裕と仲直りできて」

僕はぎこちなくうなずいた。心はすっきりしているので、僕は笑顔でその言葉に頷けたけど、彼女と裕の会話のあとじゃそんな簡単に喜べない。

「変なとこ、見せちゃったよね。ごめんね」

「いいよ、でも仲悪いんだね」

僕はいってからしまったと、口もとを押さえた。彼女は気にしないで、と笑った。

「前はそうでもなかったけど、中学にあがってからお母さん亡くして・・・それから人が変わったな。裕はもっと大人しくて、落ち着きがあって、あたしより裕の方が上に見られてたし・・・。徹とも」

彼女は首を振って言葉を続けたが、僕は初めて聞く徹という言葉が気になっていた。

「今だっていいとこいっぱいあるけど、あたしが知ってるのはもっとちっさい頃の裕だけだから、なんかね。今はあたしなんかが知らない所にいるし、存在が遠くなった気がするの。カッちゃんたちがいい人達だってコトは知ってるし、ちいさい頃から一緒だったからあたしに言えないコトもいっぱい言ってると思う。あたしなんかは家族とも思われてないんだろうし・・・」

苦しそうだった。裕にそんな事情があったなんて知らなかった。っていうのは当たり前なんだけど。僕と裕は知り合ってやっと2週間の関係だ。知らないコトがいっぱいあって当たり前だし、それを

いちいち僕に教えたりしないはずなんだ。僕が僕のコトを誰かに話そうとしないのと同じように。
「裕のコトはわからないけど、喧嘩できるのっていい仲ってことじゃないの？　ほら、本当に仲悪いのって話したりもしないコトあるじゃない。裕が口をきく分には裕子の存在はちゃんと裕の中にあるよ」
裕子は少しうつむいた顔をあげて、そうだといいなぁと彼女はポテトを口に含んだ。
「ねぇ、徹ってだれなの？」
僕は思っていた疑問を口に出した。
「裕から聞いてない？　徹はあたしと裕の弟。三つ子の末っ子よ」
僕は名前の響きが妙に気になった。
「そうなの、同じ学校？」
「ちがうわ、徹はもっと頭のいいとこ行ってるの。お父さんが進めた所なんだけど、T大付属高校よ」
名前を聞くだけそこがどれだけすごい所か僕にも理解できた。そんな弟がいると裕や裕子は比べられたりしないのだろうか？僕のように。
僕はすごいんだねというと、裕子は満足そうに笑っていた。

次の日学校にはちゃんと裕が来ていた。
僕に気づくと裕は手をあげて大きく手を振った。僕は急いで裕の所に駆け寄った。
「おはよう。今日ははやいんだね」
「おう。えっと、昨日は本当わるかったな」
僕は少し照れた裕がおかしくて笑った。それを見て裕は僕の首に腕を回して首をしめはじめた。もちろん、じゃれあってるだけだ。
僕は首に裕のアクセサリーがあたって結構痛かった。
「そんなに笑わないでくれよな、水戸っちくん」
「いたいってば、離してよ」

僕は非力だ。その為、その腕を振りほどく力はなかった。
ぞろぞろとカズトやケンちゃん、薫がやってきて僕らが普通であるコトにずいぶん、ほっとしていた。そして、ほっとして僕の頭をぐちゃぐちゃになるまでなで回してくれた。おかげで僕の髪はぼさぼさ、眼鏡はずれるしついてない。
「あ、水戸っちこっちむいて」
裕の方をむくと眼鏡を外された。僕があわてて眼鏡をとろうと手を出したがケンちゃんが僕の腕を押さえた。
「すっげキレー！　青いんだな」
裕だけでなくカズトと薫も僕の目を見ていた。
僕はまた昔の記憶が脳裏に駆け巡って、気分が悪くなった。ケンちゃんがそれに気づいて僕を離してくれたけど、僕の腹の中にたまったその黒いものは消えてはくれなかった。僕はそのままかがみ込んで周りの声を無視して固まっていた。
そして、気づいた時には真っ白なシーツのベットの上だった。
起き上がり、自分の体を触ってみる。特に痛いところはなく、気持ち悪いということもない。頭を打った様子はないけど、そうやってここに来たのか分からない。ベットを囲む白いカーテンを開けてみると、保健医の先生がいた。僕の様子に気づくとぱたぱたとスリッパの音をたてながらやって来た。
「だいじょうぶ？」
僕が頷くと先生はカーテンを全開にして、僕のブレザーをとってくれた。
「早く顔みせたあげたほうがいいわよ。ずいぶん心配していたからね」
僕はまた頷いた。ベットから降りて、もう少しで授業が終わるコトを知ったのでそれまでしばらく保健室のイスに腰掛けていた。保健室は真っ白いイメージがあって、入試のときの苦々しい思い出を蘇らせた。それと同時に、僕の一番真っ黒な部分が急に名乗りをあげて僕の前に飛び出した。

僕が避けようとしても、彼の持つ範囲は広くとても避けきれなかった。僕がそのままそこに呑み込まれそうになったとき、裕の声が聞こえた。

「おーい、水戸っちだいじょうぶかぁ？」

たいして心配してなさげな言い方だったけど、僕はおかげで目が覚めた。裕達は静かな保健室の中へ大きな音をたてながら入って来た。僕が手をあげて「もうだいじょうぶ」と答えると、ほっとしていた。

暖かい風が吹いて、天気は雲ひとつ無い明るい空。僕は母にいわれるままに庭の掃除をしていた。僕の家の庭には立派な芝生が広がっていて、そこにはやっぱり雑草が生えてくるわけで、誰がそれを摘み取らないと芝生が育たないわけで、母は僕にその役を渡したわけだ。

母は純性の日本人で、父の方がハーフだ。父の血多く受けついだのか、僕は目にも肌にも日本人にはないものが少しだけ混じっていた。でも、僕の妹は母とそっくりな顔なうえに、母の良くしゃべる所も似ている。普通は女の子は父親に似るというのに、僕の家庭は少し変わっているのかもしれない。

いろんなことを考えながら雑草をぬいていると、家の方から電話のなる音が聞こえた。僕が行っても間に合わないので、中にいる妹が受話器を取った。しばらく話し声が聞こえるとすぐに、僕を呼んだ。

「畑山って人から電話」

僕は黙って受話器を取った。妹は二つにくくった長い髪を揺らしながら家の中へ戻って行った。畑山といえば裕だろうか？まさか、裕子からではないと思うけど。

「もしもし？」

『あ、水戸っち？　オレオレ』

え？オレオレ詐欺か？という変な思考を僕は止めて、声の主を僕

のある限りの脳の力を使って考えた。
「裕だよね？　どうしたの？」
『いや、どうしたもこうしたも、今日オレらと遊ばないかと思って電話したわけよ。っていっても、他の三人はいろいろいそがしいみたいだけどな』
ふーん、とだけ返事をした。
『オレと一緒にあそぶのいやか？』
声が低くなって急に大人しくなった。僕は少し慌てた。
「いやじゃないよ。でも、どこいくの？」
受話器の奥で高らかに笑う裕の声がひびいた。何がそんなにおかしいんだろう？
『俺に任せろ、いいとこ連れてってやるからさ』
「うん、じゃ楽しみにしてる。あ、でも僕今、庭掃除してるから終わってからいくよ。どこ行けばいい？」
『へっへっへ。実はオレ今お前ん家の前にいるんだ。掃除なんかやめて出てこいよ！』
家の前にいる？なんでわざわざ電話して来たんだか、それならそうで玄関のチャイムを鳴らしてくれたら出て行ったのに。でも入りにくかったのかもしれないな。ということで僕は解決させた。
「わかった、じゃ行くよ。ちょっとだけ待ってて」
僕が出かける事をいうと、妹はお菓子を買ってくることで庭掃除を引き受けた。これでも僕は妹をカワイイと思ってる優しいおにいちゃんなので、これまでにもいろんなものを買って来た経験があった。そのせいで妹は少しわがままになった気がする。

6、おでかけ

「おっす、待ってたぞ」
裕は玄関から少し離れた所に立っていた。片手にはバイクのヘルメットが見える。
「ごめん、待たせて」
「いいって。じゃいこうぜ」
片手に持っていたヘルメットが見事な弧をえがいて僕の手もとに落ちた。こっれってつまり、そういう事だろうか？僕に、僕がいまま乗った事のない乗り物に乗れって事か？
「裕・・・二人乗りしていいの？」
バイクの事はよくしらないが、僕は乗るのがいやだったし、二人乗りしてはならないバイクとかがあった気がしたんだけど・・・違っただろうか。裕はバイクにまたがって、僕に笑い掛けながらヘルメットをかぶった。そして親指をたてて後ろに乗るように促した。
「でも、ちょっと怖いし」
「何言ってんの。男だろ、バイクなんか怖がってんなよ。乗ってみると気持ちいいんだぜ」
僕はごくりとつばを呑み込んで裕の後ろに跨がった。そして裕の肩をもつと、その手に力を込めた。
「じゃ、いきますか」
やたら大きな音が僕の耳の奥を刺激した。少しだけ頭の中に痛みが走ってきたが、暖かいような冷たいような風にあたっているうちに、耳の奥もそれほどキンキンしなくなった。みるみるうちに景色が変わっていく。それが車の中と違って、ガラス一枚透した景色ではなく何の隔てのない景色であるということが、とてもすっきりとした気分にさせた。
裕は僕にこの景色を見せたいと思ってくれたのだろうか？
僕は裕の後ろで首を振った。そんな都合のいい事考えるなんて、

自分はおかしいと思ったからだ。だいたい、僕と裕は友達だけど、裕が僕をめちゃめちゃ頼りにしているわけではない。昔の友達のように、僕は一緒にいるだけ用なのだ。一緒にいて、遊びたいときにだけ遊んで、その他のときには声をかけない。僕はその程度のちっちゃな存在なんだ。間違っても、図に乗ってはいけない。

いつの間にか、バイクは止まっていた。

「ついたぞ」

目の前を見上げると、そこは人通りの多い若者の集まる場所のひとつだった。ビルもならぶし、ショッピングモールもあるし、ゲーセンもある。僕が最も苦手とする場所のひとつでもあった。

バイクを降りると裕は適当な場所にバイクを止めてさっさと歩き出して行った。

僕がどこに向かっているのかきいても、お楽しみに。と言うだけだったから僕は人混みの中に突っ込んでいく裕の背中を必死においかけるはめになった。人酔いしやすい僕も彼をおいかける事だけに集中していたせいか、酔う事はなかった。

「ここ、ここ」

まるで鶏が鳴いてるみたいだった。裕が指差す所はライブハウスだった。料金は映画を見るよりちょっと高いくらいだ。

「入るの？」

「もっち。今日ここで薫が出てんだよ。ほら、バンド組んでるって言ってたろ？」

あぁ、そういえば。

「見るだろ？」

僕はうなずいた。

中は地下になっていて少し暗かった。

すでに薫とは別のバンドがステージに立って歌っていた。客の入りはそんなに悪くなさそうだ。といっても、こんな所に来たのはじめてだし僕は裕からの情報からそうだと知っただけだけど。それに

しても、音がやたらとうるさく感じられた。耳がいたい。
「薫のバンドは次だ！間に合って良かったな！」
大声で話さないと聞こえないぐらい音がそこに充満していた。まだ乗っていないお客もいるけど、騒いでる人もいるから普通の音量では会話はできない。僕はそんな中で緊張していた。裕が堂々としているのが心の救いだった。
「でてきたぞ！」
前を見ると少しずつ人垣ができていた。僕と裕もその中に紛れ込んで薫の顔がよく見える所まで駆け出した。メンバーが現れると今まで以上に黄色い声援がそこを埋め尽くした気がした。
薫はギターを持っていた。僕にはそれがどういった価値を持つものか分からなかったけど、裕は妙に感心した声をあげていた。
「あれはめちゃくちゃ薫がほしがってた奴だ！　高いからってあきらめてたのについに買ったみたいだな！」
僕はふーんとだけ言った。
こんなに興奮したのは初めてだって言えるくらい、薫たちの演奏に僕は刺激を受けていた。凄いの一点張りで、僕は裕をあきれさせるほどずっとその言葉を口にしていたらしい。でも、それくらい感動したってことなんだ。
「なんだ、来てたのか！」
薫は素っ頓狂な声をあげて、僕らを迎えた。
「うん、演奏聞いてたんだ。いつもながら、カッコいいいねぇ」
僕は一生懸命に首を縦に振り続けた。
「はは、ありがとよ。それにしてもなんか珍しい組み合わせ？　でもないか、でも何か裕が隣にオレら以外の友達連れてるのって初めて見たかも」
「そうだっけ？」
裕は笑った。僕は少し薫を見る目を大きくしてしまった。口からそれは本当なのか？聞きたかったけど、聞くのが恥ずかしくなって聞けなかった。でも、本当なら嬉しい。

薫のバンド仲間の人が薫を呼んで、薫はすぐにそっちに行ってしまった。薫以外のメンバーは年上だったり、違う学校の人だったりで僕や裕さえも知らないやつだ。薫に打ち上げにこないかと誘われたけど、僕も裕も断わった。それにはそういう理由があったんだと思う。

「さ、次は遊びに行きましょうか？」

僕の背中をポンッとたたいてまた先先と前に進んで行った。

次に行ったのはディスコ？だろうか、バーだろうか。とにかく、僕には縁のない所だった。

入ってすぐ、裕の周りに一気に人だかりができて僕は入ろうとしても入れない境界線の外っかわに追い出された。しばらく、カウンターの所に座って裕が楽しそうに、チェケラッチョ系な男や化粧ばりばりの女の子と話しているのを見ていた。カウンターにいた男性が僕を哀れに思ったのか、水を出してくれた。

「まあまあ、裕ちゃんは人気者だからさ。それにしても、初めて見る顔だね。名前は？」

僕は緊張でからからになった喉を潤す為に水を飲み干した。

「水戸敦です」

「そうそう、水戸っちよ、マスター」

後ろから裕の声が聞こえた。振り返ると話終えたのか、裕が突っ立ってマスターと呼んだ男性に水をねだった。

「ふーん、水戸っちね」

マスターの目がきらっと光った気がした。

「そう。おーい、お前らこちら水戸っち。オレのダチでーす」

裕がさっきまで話していた友達が僕の方を一斉に見た。まるで獲物を見るような目に見えたんだけど、僕は無理矢理笑って頭を下げると、友達の何人かが僕の方に来てじろじろと顔をなめ回すように見た。

そして、裕に初めて合ったときのようなリアクションがかえって

きた。
「キレイな顔してんな。てか、珍しい顔」
珍しいってなんだよ。
「だろ？　水戸っちクォーターなんだぜ。カッコよくね？」
何人かがその言葉にうなずいた。どこがなんだ？という言葉を呑み込んで代わりに僕はとりあえず笑ってありがとうと言葉にしていた。
裕がビリヤードというものをしてるときも僕はカウンターにいた。そのときはもう僕は一人ではなく、裕の友人の何人かと話をしていた。でも、あんまり会話になっていなかったかもしれない。僕は緊張してたし、なんだか場の雰囲気にもなじめなくて、裕の友人達に僕の存在を失望されないようにするのでいっぱいいっぱいだった。
「水戸っち、裕と同じ学校でしょ？　裕ってやっぱモテてる？」
女の子の一人が聞いてきたが、僕は裕が誰かに告白されてるところも、ラブレターをもらう所も見た事がない。
「いや、どうだろ？　告白されてるのとか見た事ないけど」
「マジで！　うっそ、ありえねぇ」
なんでそこまで反応するのか、僕が首を傾げてると同じように驚いていたマスターが口をひらいた。
「水戸っちは知らないだろうけど、裕は中学時代、女１００人切りを目指していた男だったんだよ」
僕は驚いて、大きな声で「うそ！すごい」と言っていた。すると、マスターを含めた全員が笑った。
「うっそ。いやぁ、水戸っち結講からかえるね。いいキャラしてるよ」
そりゃどうも。少しだけ赤くなった頬を隠すようにかいた。
「でも、マジ話。裕は中学んときめちゃめちゃモテてたよ。でも、彼女とか興味なさげでさしかも、今は本当に丸くなったけど昔もっととんがってる感じで、オレらでさえも近寄れなかったもんな」
そういう話はよく聞く。裕がすごく荒れてたって。

「まぁ、裕にもいろいろあったんだろうけど、またこうしてここに来てくれて嬉しいよ。金にもなるし」
マスターの最後の一言が僕らを笑わせた。急な爆笑に気づいた裕がなになに？と真剣に訪ねて来るが、誰もが知らん顔して結局僕が締め上げられてしまった。それでも僕は何も答えなかったけど。

本格的な暗闇になって来た頃、僕と裕はそこを出た。
帰る間際にマスターを含めた裕の友人が僕と裕に「またこいよ」と言ってくれたのはすごく嬉しかった。でも、それを覆すような出来事がその後のボクらの前に現れた。
バイクを止めた場所まで行くと、裕のバイクの上に誰かが座っていた。盗もうとか、遊びで乗っている感じではなく、ただ何かを待っている感じだ。制服姿で僕らとは世界の違った感じの、ぴしっと着こなす奴だった。もう僕にはそれだけで彼が何者なのか簡単に想像できた。そして裕の表情からも簡単に読み取れた。
近付いていくと、バイクの上に乗った彼は僕らの方を見た。
裕や裕子とはまったく似ていない顔立ちだが、二人の持つ香りがした。短くて整った髪の毛、キチンと着られている性服に、背中に背負っているリュックの厚み。どれも裕からは考えられない姿だ。これはもはや表と裏といった感じ。
彼は裕を見てから僕の方を見た。そしてにっこり笑うと、なんだか爽やかな印象を与えられた。

7、末っ子

バイクの上に乗っていた彼が立ち上がって僕らを見た。爽やかな印象を受ける彼が誰なのか、もう僕には分かっている。あとは確認できればいい、裕の口から。

「な、なんでお前、こんなとこに？」

予想通りというべきか、裕の声は見事に裏返っていた。目の前の彼は僕を見ると少しだけ目を細めた。

「相変わらずだな、裕。オレだってここに来てもいいだろ？」

「オレはそういう事を言いたいんじゃない。お前の本性ぐらい分かってるし」

本性？　僕は自然と首を傾げた。それをどう解釈したのか目の前の彼が僕に声をかけた。いくつだと思っているのか、なんだか妙な優しさが含まれたいい方だった。

「裕の友達？　珍しいタイプのやつだな。なんて名前？」

僕が名前を言うのを遮って裕は僕の肩をつかんだ。そして、そのまま僕を後ろにやった。邪魔するなと言ってるのか、関わるなと言ってるのか、とりあえず僕はこの場にいない方がいいということはよく伝わった。

「オレの質問に答えろ。どうしてオレのバイクに乗っている」

目の前の人はバイクから降りた。

「裕が来ると思ったから。このバイクを知ってたから。に決まってるだろ」

今までの優しそうな表情が消えて、今の裕と同じような冷たい表情をした。そのせいで僕は少しだけ背筋に悪寒がはしった気がした。

「オレの事は放っとけ！　徹がいるから家を出てるんじゃないって言ってんじゃん」

叫びのようだった。心の奥底から声を振り絞って伝えている感じ。僕はこの人が徹だったんだと、改めて確信した。そして、裕の背中

からその成り行きを見守った。
「ならどうしてもどってこない？　オレの事が原因じゃないなら帰ってこいよ。だいたい、どこで生活してるんだ？」
「だから放っとけ！　お前ら本当に迷惑なんだよ！　そこどけよ、お前の顔なんかみたくねぇよ！」
　裕が僕の手をつかんで徹と呼ばれた男子のとこまでいくと、二人して火花の散るような睨みあいが始まった。つかまれた手を振りほどく事もできずに、今度はあせりが僕の背筋を通り抜けた気がした。
　睨みあいは数分つづいたように思われた。
「裕も裕子も、オレを気にし過ぎてる。特にお前は・・・こっちが心配になる」
　裕の顔が一瞬ひるんだ。緩んだというより、動揺している感じ。それでも何も言わない裕にあきれたのか、溜め息を吐き出して徹はバイクの前からどいた。裕はいそぐようにバイクに乗った。何かに焦っているようにも見える。
「水戸っちこれ」
　僕にヘルメットを渡し、僕は来たときと同じ位置に腰をおろした。そしてヘルメットをかぶる前にもう一度だけ徹を見た。笑っていた。でも、それは笑顔とは違うものだった。裕もまた、笑ってはいなかったけど彼と同じ意味を持つ感情をいだいているように思われた。
「徹」
　徹は裕の方に顔を向けた。裕はヘルメットを脱いで、じっと徹を見ている。
「もう、来んな。お前にはお前の世界があるんだし、オレとは関わるな。じゃぁな」
　裕はすぐにエンジンをかけてバイクを動かした。僕は最後まで彼の寂しさを隠した表情が忘れられなかった。そして裕の声がどこか叫んでいるように聞こえたのも、確かなことだった気がした。
　裕に何があったのか知らない。知りたいと思っていたけど、裕子の事を口にして失敗してから、押さえていた。でも、僕はきになっ

ていた。これは興味だけじゃなく、裕の事、裕子の事、徹の事、関わった事から僕と仲良くしてくれた二人が友達になってるのなら、本当の意味での友達なら、僕は今度こ相談相手になりたいとおもったんだ。

ただ、それだけのこと。

ちっぽけな僕の欲だった、知りたいと思うことは。

8、ランチタイム

僕は何故か、裕子と昼飯を食べていた。そういつの間にか、何故かそういう事になっていたのだ。

というのも、裕と徹とのことがあってから僕はどうにか裕の力になってあげたかったけど、以前の経験からどうしても、それに踏み込む事ができなかった。カズトやケンちゃん、薫にも相談したいけど、やっぱりそれも以前のことが関係して上手く伝える事ができなかった。いや、伝えようともしていなかった。

それから僕は無表情になっていたらしい。僕はただ、考えごとをしているが為に、どうしても表情が固まってしまっていただけだった。でも、そう取られても間違いじゃないほど僕には笑っている余裕はなかった。この小さい頭で考えなければならないことがあり過ぎて、会話についていくことも難しかったのだ。

で、僕が今日に限って渡り廊下を歩く裕子の姿をぼーっとみていると、それを変に解釈したあの四人が僕を無理矢理に裕子の所に連れて行ったのだ。仲の悪いはずの裕もそのときは何故か、嬉しそうにしていた。いや、楽しそうだったのかも。

とにかく、僕は彼等のなすがままに裕子のとなりにいる。

そして、裕子は音楽を聞いていた。僕が裕子の方を見ると、こっちをむいてにっこり笑う。すると、僕の顔が少しだけ赤くなっていくのが分かる。そこには恋愛感情はなく、女性に免疫がないために出て来た症状だと思う。

「水戸っちの弁当、カラフルね」

音楽を聴いていたはずの彼女はイヤホンを片方だけ外して僕のお弁当を覗き込んでいる。

「そうでもないよ。今日はたまたま、いつもは黄土色だよ」

「それってわかる！　卵焼きに揚げ物ばかりなんでしょ？　もうすこしいろどりが欲しいわよね。あたし女の子だし」

いろどりは必要だ。なかったら食欲にも関わってしまう。
「だね。裕子それ、何聞いてるの？」
「これ？　これは、クイーン。えっと、前に言ってた末っ子の徹が好きなの。水戸っちは知ってる？」
クイーン、QUEEN、前までテレビでよく流れていた曲だ。でも、テレビで流れているのを聴いたくらいで、まったくというほど知らない。その事実を伝える為に僕は首を振った。裕子はやっぱりね、といった顔をした。
「水戸っちって、あんまり音楽に興味なさそうだもんね」
イタイ所を突かれた。そうだ、確かに僕は音楽に興味がない。それは音楽のほかも同じようなものだ。
「やっぱりそうみえるんだ。うん、あんまり聞かないよ。それでもって、演奏しようと思った事はないし」
「ははっ、演奏しようと思う人は少ないでしょうね」
そうだな。僕はいつの間にか、休みの日に行った薫のライブを思い出していた。薫は自分たちの作った曲を気持ち良さげに演奏していた。その姿を見ると、音楽を好きな人は本当に歌が好きで、曲が好きで、作るのが好きで、演奏したくてしょうがない人たちなんだろうな。と思った。
中途半端な気持ちではないそれが、すごくうらやましく思えた事もを思い出していた。
そして、それから後の事もいつの間にか脳裏に浮かんでいた。あの、裕とその弟の徹の会話をついつい思い出していた。
「あのさ、僕気になってたんだけど、裕はどうして家をでたの？」
僕の問いに彼女は目を見張った。僕は気まずいことを聞いているのは分かっていたけど、裕よりは裕子の方がこの質問は聞きやすかった。裕子はしばらくそのままの状態で僕を見続けていた。
「それは、裕からは何も聞かされてないの？」
僕は頷いた。裕子は少し考えてから、思いきった感じで口をひらいた。

「本当は、あたしもあんまり裕が家を出て行った理由は分からないんだけど、あたしが知ってるのは裕が両親と、徹を酷く意識してたことだけよ。過剰だったといえるくらいに、徹の事には敏感だった。徹は頭がいいから、裕は少し比べられるところがあったし、私とも・・・いえ、これはいいの」

裕子は頭を振って何かを取り消そうとした。

「とにかく、たぶんいずらくなったのよ。意識するのって、すごくしんどいのよ。裕はそれに絶えられなかっただけ、今のあたしにはこれしか言えないけど」

それだけでも分かって良かった、と思う。でも、意識するのはどうしてだったのだろう？家族ってそんなに相手の事意識しないとおもうけど。こっれって、新たな謎かもしれない。

僕はこれ以上混乱したくないので、それ以上の詮索はやめた。

裕子とはそれだけの会話のあと、すぐに教室に戻った。彼女はやっぱり渡り廊下を静かにあるいていた。すこしだけ丸くなる背中が寂しく見えた。そのときになって彼女にどこにも味方がいないことに気づいた。彼女は彼女を守ってくれるはずの誰かがこの学校にいなかったのだ。

その存在とは、例えば友達であるとか。僕の場合、あのヤンキー四人組がそうであるように思える。

彼女は今ひとりぼっちなんだ。

僕は突然、裕のあの嬉しそうな顔を思いだした。僕の事を勘ちがいしてからかっているのだと思っていたけど、もしかすると彼女がひとりぼっちという事を知って、僕を彼女の側に導いたのかもしれない。それって、素敵な事じゃないか。裕は裕子をちゃんと見守っていたのだ。きっと、僕のように窓からそっと彼女の背中をみて。

僕は間違っているかもしれないその気持ちによって、心が温まるのを感じた。

彼等はつながってる、たとえどれだけ裕が裕子を突き放しても。

9、もうすぐ試験

時間は流れていった。気がつけば、もう、すでに中間テスト一週間前になっていた。

僕はテストという言葉にひどい思い出があった為に、すこしうんざりしていた。だいたい、授業も正直あまり聞いてなかったりするし、勉強自体にいろんな文句をつけてやりたい時期なのだ。

例えば、数学なんてものは高校までくると、すでに日常生活の中でいつ使うというのだ？といえるほど、訳の分からない数式があらわれるのだから。

国語においても、そこまで深く読む必要があるのか？といった感じで、本なんて読めればそれでいいと思っている。英語においては、僕は日本をでるか、と思わせるくらいキライだ。じいちゃんから言えば、英語は日本語から学ぼうとするから難しいという。僕もそれに賛成だ。

化学はあんな危険なものばかり使うのは学校ぐらいなもんだ、日常の上でそんな物を使う事はないし、使ってもなんにもならない。一番危険な科目だ。

そんな中で、唯一現代社会だけはあっても許せるものだった。先生が言ったんだ、授業初めのときに。僕だけじゃなく、ほとんどが感動したかもしれない。

『アホでいる事は、学ばない事だ。アホでいる事は、同時に世間にとっては丁度いい存在だ。考えない人間がいる事で、いろんなことが楽になるからな。でも、君たちは学んで、考えて、しっかりと政治を見つめなければならない。だから、これがあるんだ』

なるほどな。それはそうだ、何も考えない人間ほど都合のいい奴はいない。なんでもそうということだろう。

そう思うと、今回のテストも意味があるといえるものだ。

「考え過ぎてる、水戸っち実は頭かたいんじゃない？　普通そこま

で考えないけど」
あいかわらず、授業中にはすやすや眠る裕にいわれた。考え過ぎてるだろうか？そうでもないと思うけど。
「てか、水戸っち勉強すんの？　オレ、テスト勉したことねぇ」
言ったのはカズトだ。そんなに胸はっていうことじゃないけど。
「オレもオレも！　よく考えたら、高校受かったのも奇跡」
「それは言えてる」
ケンちゃんの発言に賛成するのはいいが、少しは学習しろよ。って言ってやりたい。そしてそこから始まった、懐かしい話に僕はついていくことが出来ず、無意識に窓の外を見ていた。
桜並木はすでにただの木が並んでいるという状態になっていた。これから緑が色づくのかと思うと、まだまだ桜は生きているんだと笑ってしまう。そして、渡り廊下の方を見る。
今はいつもなら裕子が通る時間だ。味方のいない彼女の背中を今日も見る事が出来るのか、僕はじっと待った。やっぱり彼女は通った。いつもと変わらない、少しだけ丸い背中。
「水戸っち！　何見てんだ？」
僕は慌てて、薫を見た。四人とも僕を見てる。そこにあるのは、勘ちがいだ。僕が裕子を好きで見ていると思っている。わかって、薫も僕に声をかけたんだ。
だんだん赤くなる頬を隠しながら、僕はべつにと返事をした。

あの四人はいいとしても、僕にとってテストは非常に重要なものだ。
僕の父がいい大学をでて、大企業で働いているため僕は出来るだけ、頭のいい子を演じなければならない。僕自身、それが別段いやなわけじゃないので、できるだけ両親の望むようにしている。地元の高校にはいったのもそこに意味がある。
まぁ、とにかく勉強は必要だ。だが、家では誘惑するものが多すぎて僕はとても勉強に集中できない。だから、学校でするのがいい

のだが、人が残り過ぎている。僕はあの四人以外とは関わることが苦手だ。だから、学校ではなくファーストフード店ですることにした。

そこには学校のやつが今の時期にいるとは考えられない。とはいえ、僕と同じ事を考えてる奴はいるかもしれないが、学校の近くのファーストフード店では丁度いい隅っこの席があるのだ。目立たなくて、人がどれだけとおってもあまり気にかけられにくい席。

僕はそこに座って、注文した飲み物を机の上におくと、試験に出て来る教科の教材を鞄から出した。

「水戸くん？」

僕ははっとして顔を上げた。そうそう人目につかない場所だったんだけど、そこにいた人物には僕の姿が見えていたらしい。立っていたのは、小学校のときからの友人である、井上美香だった。

どうやら友人とここに来ていたみたいだ。

「久ぶり。水戸くん勉強してるの？ここで？」

机の上に置かれた教材を見て、彼女はそう言ったのだろう。

「うん、テストちかいんだ。井上は友達と？」

「そうだよ、あ、でももう帰るんだ」

ぼくがふーんと言うと、彼女は友人の方に視線を向けて少しだけ困った顔をした。

「えっと、水戸くん携帯もってる？　あ、そういえば電磁波がこわいんだっけ？」

僕は中学のときに電磁波の恐ろしさを熱く語った日々を思い出した。

「よく覚えてるね。携帯がどうかしたの？　残念ながら僕は持ってないけど」

やっぱり、井上はそう言った。よくみると、彼女は少しだけ化粧をしていた。でもあまり似合わない感じ。

「ちょっと、また会えたらいいな。って思っただけ」

「どうして？」

僕はあまり井上と仲良くなかったし、ただ小学校から一緒というだけで女子の中では話をする方なだけだった。そういった意味で僕は言ったのだけど、彼女はまた困った顔をした。
「ちょ、ちょっと、相談したい事があるの。水戸くんなら聞いてくれるかと思って」
彼女がまた友人の方を見た。彼女にしてはずいぶん派手な子とつき合っているなぁと思って、気づいた。そういうことか。
「いいよ。僕の家の電話番号知ってる？　それか、僕はしばらくここで勉強するから、ここに来てよ」
「わかった。ありがとう、じゃぁ、またね」
手を振りあって別れると、僕は彼女の背中を少しだけ見て、勉強をはじめた。
彼女の背中は、裕子と少しだけにていた。

9、もうすぐ試験（後書き）

あらすじと違ったりする所がありますが、これからもっと、恋愛要素を含めていくつもりです。
これからも、どうぞ読んでやってください。

１０、突然の告白

次に井上に会ったのは、あれから三日後の事だった。僕はいつも通り、ファーストフード店で試験勉強をしている所だった。正直なところ、彼女が僕の所に来る事はないだろうと、思っていた。

小学校の時から中学まで、井上と話をしたのは数えるほどで、ほとんど会話というものをした事がなかった。だから、あの日もたまたま、声をかけてみただけというもので、僕にもう一度会おうとしていなかった気がした。

なのに現れるから、僕は惑った。

「ここ、座ってもいい？」

彼女はこの前に会った時よりも、化粧が濃くなってる気がした。そして鼻がかゆくなるような香水をつけていた。

「いいよ。なんか頼んだら？」

「ううん、何もいらない」

そう。一言そういって僕は頼んだコーラを口に含んだ。

「前に言ってた事なんだけど・・・」

「相談ごとだっけ？　何かあった？」

彼女はイスに座って、ルーズソックスを少しあげた。妙にその仕草にいろっぽさがあったのは、彼女が僕が覚えている記憶の中の彼女より、女らしくなったからだろう。

「えーっと、水戸くんって、どんな友達と仲いいの？」

突然だ。彼女は相談したい事があるんじゃないのか？まぁ、いいけど。

「ヤンキーだよ。不良高校生男子四人組」

彼女は表情を強張らせた。珍しい反応に僕は新鮮さを覚えた。だいたい、あの四人と仲のいい奴は同類ばかりで、たとえ僕があの四人といても特に驚きはしなかった。ただ一言、「それっぽくないよね」というだけだ。

でも、彼女の場合僕がそんな人達といることに驚いてる。というか、ありえないと思っているのだろう。
「本当のことだよ。僕がいままでと何も変わってないから不思議なのかもしれないけど、僕は僕だから染まるつもりはないし、僕の友達もそれでも僕と一緒にいるから、それはそれでいいと思ってる。まぁ、僕もどうして一緒にいるのか考えることはあるけどね」
「そうよね・・・。水戸くんってはっきりしてるんだね」
はっきりしてる？そうかな、僕はそんなにはっきりしてるわけじゃ無いけど、やっぱり嫌だと思うことはしたくない。ただ、それだけのはなし。
「あたし、昨日の子たちと合わないのよ。だけど、地味にはなりたくないし、かと言って派手になりたいわけじゃないの。だから、無理に合わせてる。それって、駄目なことだよね。もっと、しっかりしなきゃダメよね」
彼女の口からでた言葉のひとつひとつに、後ろめたさが感じられた。そんなつもりじゃなかったのに、とか、私はそんなんじゃないのにとか。僕にはそれしか聞こえて来なかった。
「井上がそれでいいと思ってるなら、それでいいと思うよ。僕の中では、自分で考えた瞬間からそれは自分の考え。あたりまえのことだけど、井上がその子たちといたいと思ったのは、自分の考えでしょ？　それって合わせてるんじゃなくて、自分からしようとしてることじゃない？　僕はそう思うけど。まぁ、僕の持論って当てにならないけど」
彼女は少しだけ考えた。その時間、僕はもう一度コーラを飲んだ。少し長く話すだけで喉が渇くもんだと、初めて知った。なんだか、喉がすっきりする。
彼女は急に首を縦に振って、うん、そうだよね。と納得していた。
「そうよ、そうなのよね。水戸くんの言う事が正いわ。ありがとう、なんだかすっとした」
ならよかった。僕はそう言った。

「でも、あの子たちとこれからずっとつき合っていけるのか、分からない。水戸くんは不安にならない？　自分の正い道に進んで、ハブにされたらどうしようって」
彼女は真剣だった。僕はここまで真剣な目をして相談をされたことがなかったから、やっぱりと惑う。僕の考えだけをぶつけていいものなのか、困ってしまう。でもそれを出来るだけ顔に出さない様に、僕は慎重に言葉を選んだ。
「それは、いつも感じてる。でもね、今はまだまだ出会ったばかりだし、知りあっていけるのはこれからでしょ？　もし、これから先もずっとそんなことを考えていたら、それは友達じゃないと思う。まだ、始まったばかりだし焦らなくていいよ。そうじゃない？」
「それはそうね、まだまだわかんないわよね」
僕は強く頷いた。
彼女は大きく溜め息をついて、今までに見たことのない微笑みをみせた。緊張がほぐれてほっとしたと言ってるように見える。
「ありがと。それと、ごめんね」
「なにが？」
彼女に謝られるような事は何もないはずだけど。
「試験前なのに無理言って聞いてもらって」
あぁ、そういうことか。僕は少しだけ笑うと、いいえと返事をした。
僕が彼女の次の言葉を待つ為に教科書を開きはじめると、彼女はしばらく携帯をいじっていた。しばらくの沈黙。僕はたいして気にならなかったけど、彼女は携帯にかじりついて僕の様子を探っているように見えた。
そして時々、僕に何かを話しかけようとするのに、結局口をつぐんでしまっていた。
「・・・井上」
彼女はイスから飛び上がりそうなほど、僕の声に反応した。
「な、なに？　もしかして、邪魔？」

「いや、別にいてくれるのはいいけど。僕帰るんだけど？　井上はどうするの？」
「わ、私も帰る」
彼女は立ち上がった瞬間に、どこかのコントみたいに転んでしまうのではと心配になるほど、慌てて立った。僕は机の上の教材を鞄にしまいながら、彼女のあわってぷりを見て笑っていた。彼女は気づいていなかったけど。
一緒に店を出たあと、僕は寒いねとか、どうでもいい事を彼女に話していた。彼女はうつむきながら、僕の後ろをあるいていた。並んで歩けばいいのにと、思いながら僕はちらちら彼女の方を見た。
外はすでに夕焼け空が広がっていた。だんだん暗くなるのが遅くなっていることが、夏を予感させていた。
僕がまた彼女の方を見ると、少し後ろの所で彼女は立ち止まっていた。
「どうしたの？」
僕が近寄って、声をかけると彼女は両手を頬に当てて僕の方を見上げた。真っ赤になった顔のまま、潤んだ瞳がすこしカワイかった。急になんだか化粧も似合うんじゃないかな？なんて思っていたりした。彼女が大きく溜め息をつくと、ゆっくり頬に当てた手を下ろした。
「水戸くんって、鈍感」
「は？」
僕は間抜けな顔をしていたと思う。彼女の頬が少しづつふくらんで、そして笑った。
「いいかげん、気づいてよ。私、これでも四年も恋してるんだけど」
僕は頭を傾けた。何をいってるんだ？僕はそう示したつもり。
「何よその顔。まだ、わかんないの？」
僕は更に頭を傾けた。彼女はもう一度頬を膨らまし、真っ赤にした顔で僕に言った。

「水戸くんが好きです」

11、悩み相談

真っ赤なトマトが走って行った。僕は僕の耳を疑いながら、その場に立ち尽くしていた。

彼女の背中は、裕子とは違ったものだった。あのとき、どうしてそう感じたのか、今の僕にはまだわからない。でも今は、それどころじゃなかった。彼女はなんて言ったんだ？僕の事が何だって？

「えっ？　告白された？」

予想通り。四人は四人とも、同じ反応をした。驚いてる、この上なく驚いてる。裕にいたっては食べかけのパンを落としてしまっているし。

「その反応はないんじゃない？　僕が告白されるって、おかしい？」

僕の言葉にやっと四人は現実世界へと帰って来た。そこまでひどい反応する事ないと思うけど。まぁ、僕の容姿も容姿だから、それもしょうがないのかもしれない。ちびだし、男らしくないし、弱っちいし。自分でも悲しくなるほど自覚してるし。

「いや、そんなつもりはないんだけど・・・。なぁ」

カズトは同意を求めてケンちゃんを見た。ケンちゃんは迷惑そうな顔をしながら、結局何も答えなかった。口が開いてしまらないという状況がこういうモノなのだと、僕は初めて知った。それと同様に、薫は無理に笑いながら、よかったなとか言ってる。どう、よかったんだ？僕は、彼女からの告白を望んだわけじゃないのに。

「で、どうするんだよ？　返事」

一番驚いていたにも関わらず、冷静な事を言う裕は僕と目が合うと少し困った顔をした。

「・・・どうしよう。どうしたらいいんだろう？　僕、初めて告白されたし、彼女をそういう対象でみたことないし・・・。よくわかんない」

裕は大きな溜め息をついた。これは、うんざりした感じの溜め息

だ。
「わかんねぇの？　自分の中で、その子がどの位置にあるのかってことぐらい。すきなのか？　すきじゃないのか？　それくらいわかんじゃねぇの？」
裕はイライラしてるのか、足もとに落ちたパンを拾いあげるとゴミ箱の方に向かって歩き出し、そのまま教室を出て行った。ケンちゃんは後を追ったけど、カズトと薫は僕にまた、気にするなと言った。
気にはしていない。今回の場合、僕は悪くない気がする。裕が勝手に怒ってでていっただけだ、僕のせいじゃない。

僕はその日、結局試験勉強の為にファーストフード店には行かなかった。彼女が来る事が恐かったし、返事も考えられていないまま、会うのがいやだった。それに、裕の言葉も胸にのしかかってる。
僕の中で答えは出ている。でも、それで傷付く彼女を見たいとは思わない。だいいち、彼女は四年も僕に片想いしていたと言うんだから、簡単にポイッと言ってしまえるような返事はしちゃいけないと思う。
考えているうちに、時間はするすると流れて行った。気がつけば、今はもう試験が終わっている。僕は勉強した成果を発揮できただろうか。無心といういがいの何でもない状態だったから、あまりいい結果は出ないと思う。これって、やってしまったと言うのか。
僕は試験が終わると、すぐに帰る準備を始めた。教室を出たとき、目の前には裕がたっていた。
裕は僕を見つけると、あごで道を示した。そこは玄関側の道。一緒に帰ろう、ってことだろうか？僕は裕の歩く後ろでのそのそと歩きはじめた。こうしてまっすぐ顔を合わせるのは久ぶりな気がする。
「水戸っち、なんか食べたいもんある？」
下駄箱まで来ると、裕がやっと口をひらいた。僕からは顔を背けているけど、裕は笑っているような気がした。声が、そんな感じな

のだ。
「うーん、今の気分は寿司」
「寿司？　却下、高すぎ。他は？」
「えー？　じゃぁ、鉄板焼」
裕は靴を履き替えて、歩きはじめた。そして、僕の方に顔だけ向けると、にこっと笑った。
「それに決定！　行くぞ鉄板焼」
僕は鉄板焼じゃないけど。ま、いいか。さっそうと走っていく裕の後を僕はおいかけた。

学校の近くではなかったが、僕もなんどか来た事のある店だった。鉄板焼のメニューの数は豊富で、一品一品が結構安くてウマイのだ。家族や、大人数で来ると丁度いいかんじ。店の中は広いし、座敷とつくえと選べるのも気楽でいい。
僕と裕は二人なので、遠慮して机側の席を選んだ。
「オレがおごってやるから、しっかり食え」
「え、裕がおごるの？　なんで、なんかわるいじゃない」
「いいって、オレ丁度きのうが給料日だったし」
なるほど、じゃぁいただきます。僕は早速何品か注文した。
「でも、なんか変な感じ。こんなことされんの初めてだし」
「おれも、おごってやるのは初めて。でさ、水戸っち返事したのか？」
直球だ。そんなずばっと切り出されると、困ってしまう。僕もここんとこずっとそればっかで、試験が手につかなかったんだから。
僕は水をぐびっと飲み干した。
「まだ。考えてるの」
おいおいと、裕はあきれた調子で言った。
「早く返事しろよ。男だろ、ずばっと言ってやれ」
そう言われてもなぁ、四年越しの恋された彼女にそんな簡単すぎる答えは、あまりにも矢礼じゃないだろうか。

「裕は、そういう経験ないの？」
「オレ？　あるけど、まぁ人並みには」
僕はマスターの言葉を思いだした。女百人切りを目指したとか言ってたけど、それが人並なのか？
「なんていうかなぁ、告白ってオレ良くわかんない。される事はあっても、したこないもん。水戸っちはあるのか？」
「ないよ、告白されたの初めてって、言ったじゃない」
そうだっけと、裕は首をひねった。
「でもなんでそんなに考えるわけ？　水戸っちの中では返事決まってるんだろ？　じゃ、言ってしまえばいいじゃん」
「そういう訳にいかないよ、彼女は僕に四年越しの恋をしてたっていうから・・・」
「じゃ、尚更はっきり言ってやれよ。好きなら好き、好きじゃないならごめんなさい。いったいどっちなんだ？」
僕は裕の方を見据えた。挑戦的な視線に、僕も真剣に返す。
「友達止まりだよ」
「なら決まりだな、断れよ。キレイさっぱり、ごめんなさい。それとも、もう二度と自分に関われないようなきつい言葉でもぶつけてやるのか？」
「それは嫌だ。僕は彼女をそういうふうにはみれないけど、傷付くようなことは言いたくないよ。裕はそうじゃないの？　友達以上になれない人に告白されて、傷つけたくないと思ったりするでしょ？」
裕は荒々しく水を飲み干した、そして怒っているとあらかさまに僕にわかる顔で僕を見た。そこには凄みがあって、僕はすこし裕を恐く思った。
「オレは思わない。っていうか、オレの場合ほとんど告って来た奴そんなんばっかだったし。オレははっきりと、つき合えませんって言った。傷付くとかより、オレに執着しないようにしてやったよ。オレよりもっといい奴がいるって、そう言ってやった」
瞳はまっすぐで、僕は同じようにまっすぐ見る事ができず、目を

そらした。まっすぐだ、そしてカッコイイ。そうやって、はっきりと自分に決着がつけられたらいい。僕は、うじうじ悩むことしかできないんだから。僕の答えは決まっているけど、少し迷ってるのかもしれない。僕は何者でもないけど、彼女はそんな僕を好きだという。なんだか、それはすごく嬉しい。でも、その好きっていう意味がもっと別のものだったら、僕は素直に気持ちを受けとれていた。

彼女の恋を壊したくはないけど、僕に停めておいたままでは、誰も前にはすすめない。

裕のいってる事って、そういうこと？

「泣くかな？」

ぽつりと、つぶやくように僕はこぼした。

「泣くだろ？　ずっと好きだったんだから・・・でも、しょうがない」

どこか寂しそうに裕が言うと、すぐに注文した広島焼きがとどいた。鉄板の上でジュウジュウ音をたてているのを見て、僕の胸の奥にある熱い部分が反応した。まるで、生まれたての恋が音をたてているようだと。

12、喧嘩によって気づくコト

僕はずいぶん、裕に甘えていた。なんだか裕に相談した事が、今までにない事だったから、優しく受け止めてくれた友人にすこし、心を開いていた。僕にとって、本当の意味での友人はいままでいなかったけど、裕はいままでの友人たちと違っていた。それはでも、裕に限った話じゃなくて、カズトも薫もケンちゃんも、僕には初めての事を与えてくれる不思議な存在だった。
それが、また僕を落ち込ませるものになるとは思ってもいなかった。力になりたい、そう思った自分もどうかしてるのかもしれない。

いつもの教室で、いつもより騒がしい声がしただろう。カズトは僕をケンちゃんと薫が裕を必死に押さえつけて、ぐちゃぐちゃになった机やイスはもう、ボクらの周りには存在しなかった。
怒りをあらわにする僕らは、何度も怒鳴って、おたがいをけなしてる。
もともと、僕のせいだったのか、僕の場合は裕があんまりにも井上の事をしつこく聞くのでむかついて、ついつい裕子や、徹って奴の事を口にしてた。それからもう、殴り掛かって来て、僕もそれに対応した。それですぐに僕らはとらえられたが、この通り。
「だから、いい加減うざいっての！もう、水戸っちと顔あわせたくない」
「裕はいっつもそれじゃない、僕はただ、ただ、話をしたいだけだよ！」
裕は必死にもがいた、僕に殴り掛かろうとしてるのか、もう何を言っても無駄だとそこから出ていこうとしてるのか。
僕はじっと裕を睨んだ。
「オレの事、そうやってかき回すの・・・やめろよ！言いたくない事なんか、人間いっぱいあるじゃねぇか！水戸っちだってあるだろ

！」
裕のはもはや叫びみたいだった。身をよじらせて、僕に訴えてる。
そう、訴えられてる。僕は黙るしかなかった、井上のことだけじゃなくて、いろんなことが僕の脳裏に蘇る。これは遠い記憶だ。
「ほら、やっぱり。いい返せないって事は、自分だってなんかしょういう込んでるんだろ！」
そうだ、その通りだ。僕は僕で、抱えてるものがある。
僕が黙ってると、裕は二人をふりほどいて教室を出て行った。出る前に机を強くけった裕は、なんだか寂しそうだった。その裕の後を追って、ケンちゃんも薫も行った。また残された、僕とカズト。カズトは僕を自由にしてから、僕の正面にまわって僕を睨んできた。怒ってる。でも、握りしめられたこぶしは痛そうだ。
「水戸っち。今回のはちょっと言いすぎ。裕には裕の事情があるって言ったじゃん。友達って、何でも知ってなきゃならないの？」
僕は首を振った。
「じゃあ、しつこくしないほうがいい。それに、本当に話がしたいときは、自分から言うよ。友達なんだから」
ゆっくり降り注ぐ雨みたいに言葉が、僕の心に注がれた。
気づかなかった、今まで僕は僕しか見えてなかった。僕は誰かの気持ちを考える事を、忘れていた。甘えてるんじゃなくて、もはやそれはただの自己中。自分の気持ちだけぶつけて、傷つけて、自分を正しく見ようとしてた。
馬鹿だ、大馬鹿者だ。
いつのまにか、僕は教室に独りだった。

１２、喧嘩によって気づくコト（後書き）

一番短いです。
って、それだけです。

13、ラーメン屋さん

肩を掴んで無理矢理、僕はカズトに引っ張られるようにカズトの家に来ていた。

僕は少しだけ腫れた目を、道中気にしながら目をこすっていた。カズトは何も言わずに、ただ僕の前を歩いているだけだった。

カズトが言っていたとおり、彼の家はラーメン屋だった。賑やかな街並から外れた所にポツンと建っている、ちいさなラーメン屋さんだ。でも、客の数は多い。僕の座る場所は無いように思われたのだが、カズトは一番隅の方の席に僕を座らせた。そして、正面にカズトが座る。

そして、カズトが言っていたバイトの女の人が現れた。

「かっちゃん、何してるの？」

カズトはその女の人をみると、少しだけ頬を赤くした。

「こいつダチの、水戸っち。水戸っち、こちらさんはアキコさん」

こんにちわ。と、僕とアキコさんはあいさつさした。僕は、すこしだけ潤んだ瞳でアキコさんを見るカズトを見て、なんだか分かってしまった。恋してるんだ。

「かっちゃん、お店手伝ってよ。こんなとこで、食べようとしてないで」

「今日は、こいつと話あるから、それまで待って」

アキコさんはカズトの腕をつかんで、立たせた。すごい睨んでる、よくカズトは普通にあの目をみてられるよ。

「こらっ、かっちゃん！　話なら自分の部屋いきなさい。おじさんとおにいさんの仕事の邪魔になるわよ！　ほら、おじさん見てるじゃない」

カウンターから微妙に顔をのぞかせるおじさんを見て僕は思わず笑ってしまった。その隣にいるカズト似の、ノッポな男の人が兄貴なんだろう。こっちを見ようとしているのが伺えるが、兄貴の方は

お客と話をしている。
「あっこちゃん」
「変なあだ名で呼ばないでよ」
「だって、水戸っちにここのラーメン食わせてやりたいじゃん」
演技の入った口調でそういうと、カズトは上目ずかいにアキコさんを見た。
「あーそー。わかった、わかったけど、他のお客さんに迷惑かけないでよ」
「うん」
アキコさんがカズトの腕から手を放し、すぐにカウンターの方に戻っていくのを見ると、カズトは再び座った。
僕がずっとカズトの方を見ていると、カズトは恥ずかしそうに笑いながら小声で言った。周りの音がうるさくて実はあまり聞こえていなかったけど、それでもカズトが言いたかった事は分かった。
「あの人が、俺の好きな人」
ふーん。僕まで顔が熱くなった。

しばらくすると、カズトがこの店で一番おいしいという、醤油ラーメンがあらわれた。運んできたのはアキコさんだった。僕の方を見ると、熱いから気をつけてね、と言った。そのときの笑顔には、僕の心のどこかをわしずかみにするだけの威力があった。でも、カズトがそれに気づいたので、慌てて一言感謝を述べた。
アキコさんは高校二年で、僕等の一つ上だ。ってことは聞いていたけど、僕が想像していた以上にめちゃくちゃカワイイんですけど。髪の毛はほわほわしていて、パーマがかかっている。メイクもしてないのに、見事にあがった睫毛や、整ったまゆげ、爪はあわいピンク色で切りそろえられている。僕の中の守ってあげたい女の子のイメージにあてはまる。
これはカズトじゃなくても、惚れてしまうんじゃないか？
「そうなんだよねぇ。実際、ここのお客さんの何人かも狙ってるし。

でも、彼氏つくんないんだ。なんでかな？　って聞いたら、兄貴の事が好きだって言うんだぜ！」
　思わず、カズトの兄の方を見てしまった。
「はぁ、オレさぁ。兄貴から勝ったコトないんだよねぇ。なんでもできる出来のいい兄貴って、ほんとにいるもんなんだよね」
　ずずっと、音をたてながらラーメンをすする。僕は眼鏡が曇って、うまくラーメンをすすれずにいたけど、口に入れるだけで醤油の味が広がり、スープも一口すすると、また味が広がる。思わず手が頬に当てられる。
「おいしい」
「だろ！」
　カズトは飛びつきそうなほど、体を浮かした。
「うまいだろ！　へへっ、やっぱオレんちが一番だよ」
　また、ずるずると麺をすする。
「で、さっきの話。もう、マジ落ち込んだ。なんで兄貴なんだよ！
　って、結構きつかったなぁ。アキコは初めから兄貴がいるからここで働いてたんだ。ま、兄貴ってオレと違って大人だし、優しいし、カッコいいよ。好きになる奴はそりゃ、いっぱいいるさ。アキコもそのひとりだったってこと」
　僕はついに眼鏡を外した。周りの人間からは僕の目なんて見えないし、気にする事はないと思ったから。それにラーメン食べれないし。
「あきらめるつもりなんかない。けどさ、やっぱ胸がいたいって言うか・・・これ以上好きでいていいのかわかんないよ。いっそ、拒まれて、嫌われて、会えなかったらいいんだけど」
　僕は食べるのを止めた。ぼやけて見えるカズトをじっと見てやる。ラーメンをすする音がやけに大きく聞こえた。
　そのときに僕は、井上のことを思い出していた。僕は彼女の気持ちに答えられないけど、別に好きな人がいるわけじゃない。だけど、断わらないといけなくて、でも傷つけたくなくて。

「やっぱり、ふられた方がすっきりするの？　僕は、きっちりふったらいいの？」
　僕はスープに映る自分を見た。おかしな顔だ、なんでこんなに泣きそうなんだろう。
「オレは、ふった方がいいと思うよ。だって、ふらなきゃ何にも変わらないじゃん。つき合えないなら、言わないとダメだと思う。傷ついても、ふられた方もすっきりするから、次の恋を見つけられるよ。でも、あいまいな返事だと何も出来ないよ」
「・・・そうだね」
「オレ、ふられたら・・・奈落の底につきおとされて、二度とはいあがれない夢を見そう」
　僕はカズトを見た。目が潤んでる、たぶん想像してしまったんだろう。っていうか、いまの一言、僕においうちかけてるんだけど。
「オレの場合だって！　その子はどうかしんないよ」
「ふーん。ふーん」
　僕はまたラーメンをすすった。

１４、心が痛む

僕と裕の席は、隣同士だった。だけど、いつの間にか僕と裕の席は離れていた。

それに気づいたのは、試験が終わって、テスト返しが終わって、もう６月も半ばになっている頃だった。僕はあまりかわらず、窓際から二列目の前から二番目の席だった。裕は、廊下側で前から四番目ぐらいだ。僕とは、だいぶ離れてる。結局、僕と裕はあの喧嘩の日のとき以来話をしない。カズトや、けんちゃんや、薫は僕のところにきて話をする事があるけど、裕は僕の方を見ようとしないし、授業もよくサボる。

裕のいない時に、ケンちゃんが僕に教えてくれた事がある。ケンちゃんとは実は上下の席なのだ。授業中やっぱりケンちゃんは寝ているが、たまに話をするときがある。

「オレ等は・・・中坊のときからずっと、なんか心に穴があいてんだよ。それを埋める為に、馬鹿やって、自分の気をはらして、すっきりして、でも本当は何にも変わんなくて。ずっと、どっかで泣いてた。オレは、彼女いるし、カズトも今好きな奴いるし、薫は音楽があるし・・・でも、裕って何もないんだよ。オレ達の中でも、裕って一番荒れてて、手がつけられない問題児のくせに、何も無くて、たぶん裕にとって水戸っちは少しだけ、穴を埋める存在だったかもしれない。オレ等は、気休めでしかないけど、水戸っちはもっと特別だと思う。だから、待ってやってよ。あいつのこと」

僕はただ、頬を濡らすものの正体も知らずにうなずいた。

「水戸っち！」

声の主は裕子だった。久々に見るその顔は、裕と同じものだと思うとなんだか胸がいたい。

僕も裕子も、学校帰りだ。まだまだ、日は高く彼女も僕も、長そ

でのカッターシャツの袖をまくり上げて暑さをしのごうとしていた。彼女は、長い髪の毛を二つにくくっていつもと違って見えて、僕は変に胸を締め付けられた。
「なんだかひさしぶりね。かっちゃんから聞いたんだけど、裕と喧嘩したんだって？」
「うん、今回はなんか上手く謝れないんだ」
そうなの？と彼女が聞いて、僕はそうなんだと答えた。しばらく僕はあまり見ようとしなかった外の景色に目をやった。人がいる、いろんな姿の人がいる。まだ明るいから、犬の散歩をしてる人もいる。子供が走り回るのを見ると、懐かしさを感じる。僕って、成長してるのかな？
裕子は急に立ち止まって、ある方向を指差した。
「よってかない？」
そこはいつものファーストフード店だった。

僕らが中に入ってみると、いつものように多いのか席はほとんど、女の子やカップルや、男同士で座っている奴らばっかだった。知ってる奴がいるか、井上がいるか、そんなことを気にしていたが特にそういった人は見当たらなかった。
僕はいつものようにドリンクを注文し、裕子も今日はドリンクだけを注文した。
「えっへっへ。ここの割引券友達からもらってたの」
嬉しそうにその割引券を見せる裕子を見て、不思議な感じがした。そういえば、最近あの渡り廊下で彼女の姿を見る事がなかった。というのも、僕の席が窓から放れたというところにもあるのだが。
友達ができたのか、友達はもとからいたのか、また別の友達か？そんなことを考えながら、僕は嬉しそうに笑う彼女と同じように、笑ってしまっていた。
「喧嘩って、殴り合ったんでしょ？　水戸っち、意外と短気？」
「短気？　・・・そうかな？」

裕には負けるけど。という言葉は呑み込んだ。
「でも、大きな怪我とかしなくてよかったね。でも、なんで喧嘩になったの？」
それを言うには、井上のことを言わなければならない。僕は黙ってしまった。
彼女にそれを伝えるのをなぜか躊躇ってしまう。そんなつもりはないけど、言葉が出て来なかった。やっと言えた言葉も、僕はあまり覚えていない。でも、確かに僕は井上の事を言った。
少しだけ驚いた顔の彼女が、すぐに僕の事を祝福していると分かると、僕は言葉に詰まりそうになった。心が、痛いって思った。
話し終わると、僕は散歩帰りの犬みたいに注文したものを飲んだ。
「いいなぁ、告白」
って、感想はそっちなのか。
「そんなのいっぱいあるんじゃないの？」
「あはっ。実は、あるんだけどー、今あたし恋しちゃってるからさ。水戸っちに告白した彼女がうらやましいのよ。あたしも、それを言えるぐらいの勇気があればいいのになって」
「えっ、こっい？」
見事に裏返った僕の声を聞き流してるのか、照れくさそうに彼女は頷いた。
「水戸っちは、彼女に恋してないの？」
その言葉は僕においうちをかけた。言葉がナイフだとはよく言ったもので、僕の胸にぐさぐさと裕子の言葉が刺さっていく気がした。どうしちゃたんだろう、僕はうまく言葉が出せないし、喉が締め付けられる気がした。胸はいつまでもナイフが刺さっている。
「あ、いや、断わろうと・・・思ってるんだ。でも、ふられるってことは傷つけるって事だから・・・ためらってたんだ。けど、今はちゃんと言ってしまおうと思ってる」
「ふーん、そっか。あたしも、断わった方がいいと思う。あたしも、ふられる時はふられたい」

彼女は僕から視線をそらした。彼女もまた、想像してしまったんだろう。

僕は、カズトの言葉を思い出して彼女も同じなんだと分かった。

「でも、あたしふられたら立ち直れないかも」

だから、その言葉は僕においうちをかけているんだってば。

15、雨に濡れた頬

店を出たときは、曇り空が広がってた。勉強してる時以来に遅くまでいた。

これだけよく話すのは、あの四人以外じゃ裕子ぐらいだ。となりに並んで歩きながら、裕子は自分からいろんな話をして、笑っていた。僕も話なんかほとんど耳にはいってないのに、笑っていた。

「水戸っち、おかしいって、そんなに妹ラブでいいわけ？　てか、そんだけカワイイなら見てみたいし」

「いつかね」

僕はそういって先をあるいた。僕の歩調より少し遅い彼女の足取り。僕は彼女の方をふりむいた瞬間、彼女の後ろにいる僕を見る、女の子に目を奪われた。それを見た裕子が後ろを振り向く。

「水戸・・・くん」

いつものように、化粧している。いままでで、一番うまいかも。

そんな事を考えてる場合じゃなかった、僕は今裕子といて、いきなり井上が現れて、彼女は泣きそうで。

「井上」

出て来た言葉をきくと、彼女は走り出してしまった。僕と裕子に背中を向けて。

僕は反射的に彼女をおいかけた。裕子とすれ違ったとき、裕子がぼそっと応援してくれた気がした。でも、やっぱり耳にははいってなかった。その時の僕に見えたのは、井上の背中だけだったから。

井上においついた時、彼女は立ち止まって背中を丸くしていた。

「井上！　なんで、逃げるの？」

僕はゆっくり彼女との距離を縮めながら、息を整えていた。

「答えてよ！」

彼女は僕を見た。

目には、堪えて堪えて出て来てしまったと思われる、大粒の涙たち。ゆっくり頬につたって地面に落ちていく。
「だっ、て。水戸くん、私のことなんとも思ってないでしょ？　わかるわよ、それぐらい」
叫んでる、叫んでるみたいに聞こえる。僕は何もしていないうちから、彼女を傷つけた。
「それでも、私のコト好きになってくれるんじゃないかと思ってたけど、無理じゃない！　もう、水戸くんにはちゃんと好きな人いるんじゃない！　馬鹿みたい、なんで気づかなかったんだろ・・・」
好きな人？僕に？彼女はどうかしてしまったのか、僕にそんな人はいないんだけど、いないけど、どうしてそんな事を言うんだ？
「な、に言ってんの？」
出て来た言葉をきくと、彼女は鋭いまなざしを僕に向けた。
「これ以上私を惨めにさせないでよ！　私はふられるぐらいなら、ちゃんと水戸くんの言葉を聞きたかった」
「じゃぁ言うよ！　僕と一緒にいたのは、僕の友達のおネェさんで僕の友達だ。それ以上の感情はない。だけど、井上の事を好きにはなれないと思う。井上も僕にとっては友達なんだ、だからごめん！」
僕は頭を下げた。すると空からぽつりぽつりと小粒の雨が降り出した。僕が顔をあげると、井上が立っていた。僕を見る目は空虚で、僕を捕らえているようで、僕を見ていない。
井上の目から溢れ出る涙を僕は指ですくった。あまりにもキレイで、あまりにも近くにあって、僕は触れてしまった。
「知ってたよ・・・。たぶんそうなるって分かってた。でも、期待もしたのよ、こっち見てくれないかって。無理だったんだね。うん、ありがと。ちゃんと考えてくれて」
「そんなことないけど」
僕と同じように井上は僕の頬に触れた。そうする事が最後だって認めているかのように、おそるおそる壊れそうな玩具に触る見たいに。

「ありがとうはこっちのセリフ。気持ち嬉しかったよ、でもごめん」
「謝らないでよ、しょうがないよね。水戸くん、あの子の事好きなんでしょ？」
僕も井上も同時に手を離した。
裕子のコトを僕が好きだって？それはないんだけど。
「なんで？」
僕が聞くと彼女は虚ろな目を僕から離して、もう一度僕を見た。その瞳の中には僕しか映っていない。
「見てたら分かる。顔が違うもの」
そうなの？って僕が言うと、彼女は僕の襟首を引っ張った。そのまま僕が彼女の方に前のめりになると左頬に柔らかい感触がした。そして耳もとで「バイバイ」って言う声が聞こえた。彼女の少し高い声だ。
走っていく彼女を呆然と見ながら、僕は左頬に手をやった。
頬に触れるだけのキス
雨と涙で濡れた彼女の唇が触れた部分。僕は見えなくなった彼女を見ながら、僕の胸の奥にある恋の予感に気づきはじめていた。

雨の中を歩きながら、もと来た場所にいくとファーストフード店の屋根の下に裕子がいた。裕子は僕を見るとすぐにかけつけて、持っていた傘の中にいれてくれた。僕の様子から、裕子だって分かったと思うけど、その妙な気づかいが僕を泣かせていた。
「水戸っち、今の涙は許してあげる。全部流しきってしまいなさい。彼女の分までね」
僕は頷いたまま、彼女の肩に顔を埋めた。驚く奇声が聞こえたけど、彼女はすぐに僕の頭を包み込んでくれた。雨の中で濡れた僕の体を温めようとする彼女。少しだけ僕より背が高くて、優しくて、カワイくて、裕の姉で、好きな人がいる。それは僕じゃないけど、僕は彼女に恋をした。
僕は彼女にすっかり惚れてしまっていた。

16、裕の行方

カズトは驚いた。そこまで驚かなくてもいいんじゃないの、ってぐらい。ある程度の反応は期待してたけど、それ以上だった。
「えぇ、マジで言っちゃったの！　うっわぁ、どうだったんだよ？　反応は・・・」
「泣かれました。でも、すっきりしたよ」
「すっきり？　そりゃそうか、あれは重荷だもんな」
重荷か、その言葉は合うかも。でも、そんなことばで片付けられる感情ではない。
「でも・・・」
僕の心にはポッカリ穴があいてしまった。頬に触れると、その穴を強く感じるけど、もう一つ別の強い気持ちを感じれる。僕はその温かいものを胸の奥の方で大切に守っている。その殻を破る日はまだだけど、僕はただその存在を強く感じてしまった。
「でも。なに？」
カズトの声に反応して僕は飛んでしまいそうになった。胸を撫で下ろしながら僕は、なんでもない。とだけ言った。
人に言えるほどの度胸はない。いまはまだ。

一週間は早かった、あっという間に通り過ぎて僕は、まだ裕とは話をしていない。それも、7月にはいってから一度も裕が学校にこないのが原因だけど、しょうがない。僕が折れるか、裕が折れるかしなければ、ずっとこのままなんだから。
ケンちゃんが言うに、裕にはその気はないそうだ。それどころか、心にできていた穴が広がって、そうとう荒んで来ているらしい。別に僕のせいだって事はないと言うけど、僕と喧嘩してから荒れているとなれば僕は関わっていないと言いきれるもんじゃないと思う。やっぱり、僕から裕に話しかけるべきかな。そうなると話題が必要

となる、それは、それとなくあるんだけど、恥ずかしいな。
「悩まず、進め！　言ってしまえばいいんだ、あいつはそれを待ってるから」
ケンちゃんは直進形かな。そう思いながら僕は頷いた。

裕がいる所は知ってる。前に謝りに行ったときに行った喫茶店だろう。そのときに僕は裕の抱えているものが、大きなものだって気づき初めていた。僕が踏み込めるようなでかさじゃないって事を、気づかされたのは喧嘩したとき。それで、今は僕には何の力にもなれない事に気づかされてしまった。
ケンちゃんが言った事を信じるのなら、僕は裕を待ってみてもいいのかもしれない。けど、それほどに僕に価値があるように思えない。僕は、裕と同じように抱えてるものがある。それを思うとよけいにそう思ってしまう。
一人でいろいろと考え込んでいるうちに僕は裕のいる、喫茶店へと来ていた。
喫茶店の中に入ると、前のときとは違って若い女の人が僕を席の方に案内した。素早く、テキパキとした対応に僕は裕の事を言えないまま座った。しばらく、店の中を見回して、窓の外を見た。以前のときとは席は別の場所で、入口近い場所だった。客は数人。店は小さいので、多いようにも見える。
「ご注文の方はお決まりでしょうか？」
また若い人が現れた。僕は慌てず言った。
「裕は、いますか？」
「裕？　あぁ、畑山くんね。あの子ならやめたわよ」
女性はあっさりとそう言った。僕は口を開けたまま目を見ひらいた。
「えっ、いつ？」
「三日前よ。今はどこにいるのかわからないけどね」
僕は口を開けたまま立ち上がり、店を出た。裕がここにいない以

上、ここに用はない。女の人が何かを僕に言ったけど、耳には入ってこなかった。
裕は、裕はどうしたんだろう。そればかりが僕の頭を埋める。
考えているばかりじゃ、どうしようもない事は分かってる。僕は行動しなければならない、まずすることは裕を探す事。裕がいきそうな場所は知らないけど、それを知ってる人の集まる場所は知ってる。

「おお、水戸っちじゃないか」
すぐに気がついたマスターに片手であいさつしてから、僕は席に座った。
座ってすぐに僕の回りに何人かが集まってくる。僕に声をかける彼等を覚えていることに感謝しながら、僕もあいさつをした。
「一人でくるなんて、なんか嬉しいなぁ」
マスターが言うと、他も一緒になって頷いた。僕は赤くなりながら、頭の後ろの方をかいた。
「裕を探してるんだけど・・・しらないかな？」
「裕？　裕なら来てるよ。ていうか、ここで働いてるし」
マスターはまた僕に水をだした。
「働いてる？　住んでる所とか知ってるの？」
「ここ、ここ。マスターんとこに住んでる。オレ等もよく遊びいくし」
「いつから？」
「五日前ぐらいだっけ」
マスターに聞くように一人が言った。
「そうだよ、なんか急に来たんだ。酔っぱらってたし、何か恐かった」
「様子が変って事？　えっと、じゃぁ、僕とのことは聞いた？」
マスターはしばらく考えてから言った。僕を指差しながら、微妙に笑っている。

「聞いたよ、めちゃ笑った。お前等ばかだよなぁ。そんな事ぐらいで喧嘩するなんて。あーうけた」
「それオレ等も笑った」
いや、笑うとこじゃないし。僕は結構悩んでたりとか、怒ったりとかもして、しんどかったりもしたのに、笑われるって、つらいかも。ギスギスする心を抑えながら、僕も一緒に笑った。
「裕には、会えるかな？」
「どうだろ、裕は今たぶんあそこにいる」
あそこ？僕は首を傾げながら聞いてみるが、マスターも他も笑ってるだけだった。僕が膨れっ面になると、笑いが止まらないのか僕は結局、数分黙っているしかなかった。

17、ひさしぶりの会話

公園、でっかくて、遊ぶとこがいっぱいあって、でもデートとスポットに選ばれるそんな場所。
街中にぽつんと立っている、不思議な空間。僕も何度か足を運んだ事がある。昼間は人ばっかりで、苦手とする場所だけど、夜になると人が減り夜景の良く見える場所があったりして、僕は好きだ。
急いで駆け付けた場所は、広場だ。中央のふんスイを囲むようにベンチがあって、カップルがよく来る所だが誰もいない。たぶん雨だからだけど、ライトアップしてあってキレいなのにと、僕は思ってしまう。
裕の姿はそこになかった。他の場所を探そうとした時だった、僕の視線の隅にちらっと裕の姿を見た気がした。傘を差す僕と違って、何も持っていない人。
もう一度視線を戻し、僕は見間違わないようにその人を見た。裕だ。
「裕！」
声に反応して、体を振るわせた。ベンチの側に立ってる。木の陰になっていて見えていなかっただけだった。ずっとそこに立っていたと思われる。
僕を見る瞳に涙が浮かんでいるように見えた。
「わぁ、すごい濡れてるよ。大丈夫？」
裕に近付く僕を見ながら、裕は倒れるんじゃないかとお思ういきおいで、頷いた。
「・・・水戸っち、おひさ・・・じゃん」
抑揚のない声。雨に濡れる体がなんだか、しぼんで見える。
「裕、なんでこんなとこに突っ立ってるんだよ！　肺炎になるぞ！
夏だからって、甘く見ないほうがいい」
「でも、気持ちいいし・・・。でも、ぼーっとしてきたかも・・・」

それは見たら分かる。何時間立ってたんだってくらいだよ、そんなに濡れてるなんておかしい。
裕の足がフラッと揺れると、一気に体が傾いた。僕は傘を放り投げて裕の体を支えた。小さい僕には水を含んだ衣服をまとう彼は重かった。いろんな物が重く感じられる。それを全部受けとったわけじゃないけど、裕の衣服の分だけは持てているのかもしれない。
「ごめっ・・・立てないや」
謝る声も、荒くなっていく息も、僕の肩にのしかかる。ここまでになった裕を支えながら、僕も雨に濡れていた。

火事場の馬鹿力ってこれかぁ。と、僕はついついそんな事を考えながら自分の家に裕を運んでいた。
あの公園からだと、僕の家が近いのだ。裕の家はしらないし、裕が今住んでるマスターの所までは結構距離がある。僕の体力も考えると家しかなかった。
裕はぐったりしていて、濡れているはずなのに熱くなっていた。それもそのはず、あんなところに立っているからなんだけど、僕の体もそれぐらい熱くなっていたからっていうのもある。玄関で出迎えた母さんの声も顔も思わず笑ってしまうほど、おかしかった。あんなに焦ってる所を見るのは初めてかもしれない。それから、父さんが出て来て裕を運んだ。僕も同じようにふろ場に運ばれて、僕はとりあえず意識のあるうちに着替えた。裕の事はしらない。
目が覚めたとき、僕のベットが上にあった。裕にベットを占領されたと知ったんのは、目が覚めてから１０分後だっただろうか。
「おはよう」
声をかけてきたのは、冷えぴたを貼られている裕だった。まだ少し頬が赤くて、熱っぽい感じがした。
僕は上体を起こして、座る姿勢をとるとベットの裕を見た。
「・・・しんどかった？」
裕は目を見張った。僕も、自分の言葉に驚いた。

「僕は中学んとき、イジメ合ってたんだよね。っていっても、中一の時だけだったけど、でもしんどかった。誰も僕を助けてくれなくて、誰も僕を見てくれなくて、僕ってそんなにちっぽけな存在で、そんなに意味のない存在で、僕にはい来て行く意味さえも見え隠れしてた。結局、助けてくれる人もできず、僕は僕で戦った。歯向かう事を教えてくれた人はいない、僕に味方なんかいなかったから。ずっと、しんどかった。裕は、しんどい？　僕と喧嘩して・・・しんどかった？」

僕はまた甘えてしまった。僕はもう、甘える事をしないでおこうと思っていたのに、言葉が止まらなかった。どうしても伝えたい、いや吐き出したかったものが、流れ出た。

でも、裕はきいてくれた。ゆっくり布団の中から手が出て来た。それが僕の頭をくしゃっとなでて、目を指差す。

「やっぱ・・・キレいな目じゃん」

眼鏡のない素っ裸な瞳に向かって突き付けられた指先は、血の通った色をしていた。

「ここどこ？」

「僕の家。裕をどこに連れて行ったらいいのかわかんなかったから、家に連れて来ちゃったんだ」

ふーん。と返事が聞こえた。

「オレ、しんどかったかも、でもソレ以上のものもあった」

急に話しはじめた裕は僕の目をじっと見ていた。真剣な顔をするのは、そして見るのはひさしぶり。

「水戸っち、オレの中ででっかいもんになってたから、つらかったかも。オレ素直になれないから、謝る事もしなかったし、水戸っちは前みたいにすぐにオレんとこ戻ってくると思ってた。でも、いくら待っても水戸っちこないし・・・無理だって気づいたら、もうどうでも良くなって・・・」

それであの場所に、雨にうたれながら立っていたわけだ。裕の言葉の続きを勝手に読み取った。僕は裕のおでこに貼られた冷えぴた

を触って、ぬるくなってる事を確かめると立ち上がった。そういえば腹も減ってる。
「かえのやつもらってくるよ」
頷く裕を見ると部屋を出た。

下に降りると、母が洗濯物を干していた。僕を見つけるとすぐに寄って来て、ニコニコした笑顔のまま話しかけてくる。僕はこの母親が苦手だ。こんなに良くしゃべる女とだけは結婚したくない。
「あっちゃん、具合どう？　起きて来て大丈夫なの？　お友達は起きた？　あ、おかゆ作ってみたんだけど食べる？　冷えぴたの替えはどうかしら？」
あぁ、うるさい。そんなにいっぺんにいわれても困るし。まだまだ何か言おうとする母の背中を押して、僕は台所に立たせた。
「とりあえずおかゆ用意してよ」
僕はその間に冷えぴたを探した。

「水戸っち、イジメあってたの本当？」
おかゆを口にほおばりながら、ベットに半身だけ起き上がらせて裕が言った。僕も同じように口にほうばりながら、頷いた。
「まっじでぇ。じめじめした奴らだな。っていっても、オレも何度かかつあげとかしてたけど」
そういうのもあったなぁ。
「オレは喧嘩ばっか。たたいて蹴って、殴ってボコって。楽しい、って気持ちはなかった。すっきりもしない毎日だったし、オレはみたされた時間が欲しかったのに、それは消えて行くばかり。つかめそうでつかめない所にすぐに行ってしまうんだ。それに気づいた時は遅かった、オレはすでに取り返しのつかない所まで落ちてた」
それはケンちゃんにきいたものと同じだろうか。裕の心の穴をさしているのかも。そんな話をしてくれるのは、初めてかも初めてかも。

「オレ等、中学の時ひどかったよ。自分のやってることが訳解んなくなって、自分が壊れるんじゃないかって思う時もあった。オレって、成長したかも。それも中学三年ときにいろいろあったからっていうのも、あるけど。水戸っちみたいに、そんなふうになるのが夢だったから」

夢、僕なんかになる事が夢？あさはかだ、そんな抵いものを望むなんて。僕は裕達みたいに堂堂といきたかった。イジメに対抗した勇気も、僕一人の力じゃなかったし、僕は一人じゃ何にもできないんだから。裕にそんな風に言ってもらうのは、もったいない気がした。

「へへっ」

でも嬉しかった。そう言ってくれる人は、そうそういないもの。

「変な笑い方。がっはっはっは、とかわらえねぇの？」

「下品だよ。それに、僕のベットの上にご飯ツブこぼさないでよね」

大口を開けたばかりに、裕の口からは数ツブの飯がこぼれていた。照れくさそうにそれを拭き取ると、裕はまた口にほうばった。

「えっと、えー、あの、僕」

裕が眉根を寄せて僕を見た。何がいいたいんだよ、って目がいってるのが分かる。

「僕、裕とまたはなせて嬉しいよ。よかった、仲直りできて」

へっへっへ。と僕が笑うと、裕は僕から顔を背けて、ふーんとだけ言った。僕から見える裕の耳が赤くなってるのに気づいて思わずまた笑ってしまった。

おかゆを食べ終わると、僕は裕に新しい冷えぴたを貼って、熱を測らせた。その間に食器をかたずけるつもりだったが、裕は僕の服の裾をつかんだ。思わず転けてしまう所だったが、ぎりぎりセーフ。食器も割れるコトなく、僕も無事。

「オレ、言ってもいいよ」

急に真剣になって、裕は言った。

「なにを？」
僕が聞き返すと、気づけよって、頬を膨らました。
「オレんちの事情さん。知りたいんだろ？　どうせ、今日はまだお世話になるつもりだし。ってダメ？」
「それって、家に泊まるってコト？」
裕が頷く。ダメじゃない、けど図々しいくないか？まぁ、いいんだけど。
「聞かせてくれるならいいよ。裕も熱下がってないし」
やったと言って、裕は布団にもぐった。
僕は鼻歌まじり階段を下りた。そして重大なコトに気づいた、今日は金曜日じゃないかって。

18、家の事情

裕の熱は、三十八度もあった。これって結構あるけど、僕は熱もないのに学校休んじゃったし。

「裕くん、大丈夫？　お薬ここにおいとくからちゃんと飲んでね。それで、親御さんに連絡はしたのかしら？　別に家に泊まってくれるのはいいのよ、でも心配はかけさせないでね」

裕は僕に見せたコトのない、すこし恥じらったような笑顔を母に向けて、寝た。というのも、母を安心させる狸寝いりだけど。僕は母と一緒に、部屋を出た。学校を無断欠席したコトを怒られるのかと思ったけど、母はそんなことをいちいち怒る人ではなかった。これも小学生のとき、イジメを受けた僕をただ一人理解してくれたひとだからだ。まぁ、天然な人でもあるから、そういうことに無頓着名だけかも。

「裕くんのことちゃんと看てあげなさいよ。それで、着替えたらお買い物行ってチョウダイ。熱には桃の缶詰めってきまってるの」

そんなの初めてきいたよ、お母さん。言葉を飲み下しながら、僕は急いで着替えに戻った。

裕はうっすらとまぶたを持ち上げて僕を見た。

「これ、桃。食べれる？」

僕が買って来た桃を見ずに、辺りを見回す。僕が着替えに戻って来たときにはぐっすり眠っていたくせに、まだ眠そうだ。

「たべる。今何時？」

「もう、五時だよ。目覚めた？」

「ぜんぜん、っていうかこの家寝こごちいいべ」

そういって布団に顔を埋める。でも、僕がお皿に入れた桃を差し出すと、嬉しそうに飛びついてきた。

「裕、聞かせてよ」

昼に言ってたことを徹回される前にどうしても聞き出したい。僕は焦ったかもしれない。それも分かっているかのように、裕は桃をじっくり味わいあながら、僕に待てと示した。
「桃は味わって食べるもんだろ。俺の話も、味わって聞くもんなんだから、落ち着け」
僕はその通りだと、イスに座って音楽をかけた。僕が聞くのは、ほとんど偏ってる。ポップスがほとんどで、ロックなんかは聞かないし。でも、ラップは結構聞くかもしれない。でも、今流しているのはポップスだ。
「しってる。オレもこの曲好きだ」
「やっぱり！　僕もすっごいすきなんだ。いいよね、歌詞も何もかも」
僕が言うと裕は優しく微笑んだ。
「はしゃぐ水戸っち見るの、何か変な感じだな」
「そう？　僕これでも、学校でいるとき信じられないぐらいはしゃいでるんだけど」
みえない、と裕はいいきった。僕には他の人に僕がそう見えていなかった事が悲しい。自分で思っていても伝わらないものってあるもんだな、って新ためて実感。
裕が桃のはいっていた皿を置くと僕は姿製を正した。
「桃うまかった。水戸っちの母親美人なのな。やっぱ、水戸っちのキレイな顔はそんなとこからきてるんだな」
そりゃ、親の遺伝子からできてますからね。裕は布団に潜って、顔だけ出すと僕を見て視線をそらして、また僕と目を合わせた。
「オレの母さん、中学はいってすぐに事故で死んだんだ。それから、すぐに父さんが新しい人を連れて来た。それが、徹の母親。三つ子って事にしてるけど、本当は赤の他人なんだ、オレたちと徹は。母さんのことがそんなにすぐに忘れられた父さんが許せなくて、オレはグレてグレまくった。裕子は半分あきれて、今頃になっていろいろ言って来やがるし、父さんもあたらしい母さんも、オレの事なん

か無関心だ。グレ他瞬間から、赤の他人だってオレに言ってた。それがオレにもっと大きなダメージを与えて、オレはもうどこにもい場所がないって事に気づいた。でも、徹は恵まれてた。頭も良くて、態度もいい、オレだって最初は憎むに憎めなかったけど、あいつはいいやがった」

裕は言葉をきった。次の言葉を紡ぐのに、少し時間がかかった。

「徹は、世の中全部虫けらの世界だって。オレも裕子も、ここにいきてる奴ら全部虫けらなんだって。何言ってるか分かる？　馬鹿にしてるだけじゃなく、あいつは世界に何の価値もないっていってるんだ。ちっぽけで、オレが悩んでた事なんてそれ以下だって。オレは、むいかついたけど、すっきりした。それであいつに惹かれたんだ。あいつの本物の心をオレは知りたいって思った。あいつがいつも本当は何を思ってるのか。気づいた時には、オレはあい次が好きになってた。それは、恋なのか、友情なのか、全然わっかんないけど、あいつの言葉をきいていたいと思った」

じゃぁ、どうしてあのときはあんなに怒ってたんだろう。裕は一度布団の中に入った。頭まですっぽりかぶって、僕からは姿が見えない。

「馬鹿だったよ、オレは。あいつ、オレの気持ちに気づいてやがった。それでオレは脅される形になって、いつまでもこき使われた。パシリって奴かな。でも、あいつはそんなつもりないって顔して、裕子にも同じ事させてた。オレは、あいつが嫌になった。なんで好きとか思ってたんだろうって、変になってたんだろうかって、冷めたっていうのか？　それになった。でも、あいつはオレを離そうとしなかった。あいつはそういう奴だった。だから、逃げた。オレに目を向けない、親からも逃げた。結局、徹はオレに戻って来てほしいと思いながら、オレをこき使いたいだけだ。裕子と違って、オレは本性知ってるから、使いやすいだろうし。それで、両親は変わらずオレなんか消えればいいと思ってる。もうずっと連絡とってないけど、裕子からも徹からも親の事は聞いてないし」

隠れた裕が、泣いてるんではないかと心配になったが、裕はすぐ顔を見せた。
「裕子は、真剣だったじゃない」
「・・・家の奴は信じれない。裕子だって、徹の下僕だ。あいつにいわれてやってるだけだろう」
裕の表情が曇った。
裕の心の痛み、僕が知ってしまった分は軽くなってくれただろうか。僕は、ちっぽけで裕みたいに強くはないし、そんなに大きな事を抱える事はできないけど、裕を見守る事は出来るだろうか。手助けするのではなく、安全な道を通れるように裕を見守る事。傷ついてつかれて、これ以上の傷を負わせない様に、僕に出来る事はそれだと思う。そして、たまに裕にお節介をやくのだ。
「裕、話してくれてありがと」
「うん・・・全部じゃないけど、オレもはなせてすっきりしたし。また、聞いてよ。水戸っちは安心するから」
熱に犯されておかしくなってるんだろうか、友ダチにいうようなセリフじゃない気がする。僕は熱くなる頬を押さえながら、裕に言った。僕もいわないといけない事があった。
「そうなら嬉しいよ。それで、僕の事だけど井上の告白、断ったよ。きっぱり言ってやった。それで、また裕の話。徹っていう人はよく知らないけど、僕は裕の友達だから裕を見守るよ。たまに、傷つけるような事をするかもしれないけど、裕には僕やケンちゃん、薫、カズトがいるってことわすれないでね。僕らは裕の居場所になりたいんだから。それと、無理しない事」
裕は目を見張った。うっすらと浮かんだ涙の膜が見えたかと思うと、裕はまた布団に潜った。こんどこそ泣いてるんだろう。僕はついつい笑ってしまった。
「それと、やっぱり今のままって駄目だと思う。僕がイジメに対抗したみたいに、裕も裕子や徹、親に立ち向かってよ。話し合わなきゃ何も終わらないんだから」

裕はもぞもぞと布団の中でうごめいた。
「それは・・・まだまだ考えられない」
僕は溜め い気を吐き出した。喧嘩にならないだけましか。立ち上がって、裕のそばに寄って、頭であるだろうところをなでてやった。僕がちいさい頃に落ち着かせる為に母がやってくれた仕草だった。

19、屋上で

裕の背負っていたものは僕が思っていたモノ以上だった。その夜、僕はよく眠る事ができないまま朝を迎えた。

家庭事情っていろいろあると思う。僕の場合、それは一際なかったけど、僕自身にとって家は苦痛だった時期もあった。家族って友達以上の気持ちがあると思う。兄弟なんかは、友達以上につき合いやすい。それは心を許しあってるからだし、それを徹みたいに利用するのは間違ってる。そんなことぐらい、裕だって、誰だって分かるコトだけど。

日曜になると、裕の熱も下がってその日のうちに、裕はマスターの家に向かった。僕は裕の背中を見送りながら、夏を感じさせるはずの風が冷たく感じられた。

月曜日、裕は学校に来なかった。

裕子を呼び出して、僕はあまり使われていない、音楽室の奥にある屋上に行った。

「そっか、裕はそんなコトを考えてたの・・・」

夏スカートが風にゆれて今にも捲れ上がりそうになるのを、僕はハラハラしながら見てしまっていた。男としての欲望がぼくにそうさせていた。だが、彼女にそれを悟られたくないので、僕はすぐに彼女の顔を見て笑った。

「何笑ってるの？　変ね」

彼女がいうのに僕は笑って答えた。裕の事は、言いにくいコトの他は話した。裕子に相談しておくのが、いいと思ったからだ。

「あたしは、徹に利用されてるのかな？　わかんないわ。でも、徹はいろんなものを抱えているの。それを分かってあげるコトって、近い場所にいるあたし達にしかできないことだもの。あたしと裕はずっと、徹を守ってきたの。だから、利用されてるんじゃないお思

うわ、ただ、側にいるだけ」
裕子の目がまっすぐと、空を見ていた。風は吹いていた、どこまでも、ずっと。
裕子は裕が言っていた徹の本性というものを本当に知らないのだろう。だけど、どうしてここまで信用してるのか。僕の心がまたズキズキとした。これはあまり気づきたくない。
「裕と話をしてよ。裕子も裕も、我をはらないで。裕はただ寂しいだけだもん、両親から見放されて、徹のコトも信用できなくて、裕子のこともまっすぐ見れなくなってる。ただそれだけ。話をしてみれば、裕は心を開くはずだもん。だから、話をして。まずは、裕子が、そして、徹とも」
そうね。と裕子は口もとだけで笑った。気が進まない、そう言われてる気がして僕はまた溜め息をはいた。
「ねぇ、裕子は裕のコト良く知ってるんでしょ？　頼むから、裕と話をしてよ。そうじゃないと、壊れるよ」
僕は必死だった。口から出る言葉のひとつひとつを覚えてはおらず、訳の分からないまま口に出していた。どうしても、分かって欲しかった。裕子に裕の気持ちを。
「そんなのいわれても、あたしだって困る。裕はあたしを見ようとしてくれない。そんなんじゃ、いつまでたっても話なんかできないでしょう！　あたしだって、本気で裕のコト心配してるのよ、ずっと一緒にいたんだんもん。当たり前でしょ？　急に、どうにかしろっていわれても、どうにもできないわよ」
裕子の目から大粒の涙がボロボロ出て来た。それをみて、痛む心が音をたてる。僕は胸に手を当てて、カッターシャツを握りしめた。心が苦しくて、悲鳴をあげる。裕子の泣く顔をみることがこんなに苦しい、これが恋なんだと思わせる。
裕子は両手で顔を隠して、声をあげて泣き出した。僕は突っ立てる事ばかりは嫌だったから、裕子の肩に触れた。顔は見られたくないだろうと思ったから、見ない様に何度も背中をさすった。

「ごめん、裕子のコトまで考えてなかったね。一緒に行くよ。裕が話してくれるように、僕も一緒に行くから。ね」
泣き出す裕子の肩にふれながら、震える姿を愛しいとおもった。しばらくの間、僕にとって幸せな時間が流れた。

その日の帰りだ、裕子を誘って裕が暮らしているバーまで行った。裕と裕子はそっくりさんだから、バーに入るとマスターは驚声をあげた。そして、マスターの隣にいる裕と裕子を何度も交互に見た。その姿がおかしくて、僕は声をあげて笑ったけど、裕は僕の姿は映らず、裕子を見ていた。
驚き、いらだち、寂しさ。いろんなものがそこにはあった。瞳から映る裕子も、同じようなものを輝かしていたかもしれない。
マスターはただならぬ雰囲気の二人から少しずつ距離をとっていった。裕の友人たちも、野次根性で見に来ていたけど、一歩ずつ後ずさって行った。僕も今にも逃げ出したかった。

１９、屋上で（後書き）

うーん、一番短い話になったかも。

20、話し合い

裕は裕子を瞳に映してから数秒、目を見張ったまま固まっていた。動いたと思った時には、僕がそこに映っていた。見上げて来る瞳には布団に潜ってこっちを見た時と同じ、目に涙の膜がはられていた。僕はいけないコトをしたのだろうか、でも、裕はこのままだと壊れてしまう。だから、助けたいとおもった。それだけ。

「マスター・・・ちょっと出てもいい？」

裕はマスターを見ずに言った。見てる方向は僕。そして、僕の隣に立つ裕子も捕らえる。

「あぁ、今日はもういいよ。いつもオレ一人だしな」

「ありがと」

裕はそれだけ言うと、妙な雰囲気に包まれたバーを出た。マスターはもちろん、客である裕の友人たちもその姿が見えなくなるまでずっと呆然と見つめていた。

外に出てから、まず僕と裕が並んだ。裕は僕の肩に腕を回して、睨みのきいた眼で僕を見た。逃げ出したい衝動を押さえながら、僕もその目を見る。

「どういうこと？」

怒ってる、怒ってる。

「ほら、話をした方がいいとおもってさ」

というと、裕は僕の頬をつかんだ。力が強いし、つねる部分が薄くてイタイ。

「それが、お節介だっていうの！　あぁ、もう、やだよオレ。話せねぇもん」

「僕がいるから。僕がちゃんと、話せるようにするから」

裕はつねる手を止めた。そして、後ろでいずらそうに突っ立っている裕子に目を向けた。裕子はにこりともせず、その目をみる。僕

は笑ってやった。どうにかこの場の雰囲気が和らげばいいと思ってしたのだが、二人の視界には入っていなかったように思える。
「どっか行こう、こんなとこじゃ話できないでしょ？」
僕の言葉に従って二人は頷きもせず、歩きはじめた。僕と裕、その後ろに裕子が並び、微妙な間隔がそこにはあった。沈黙しか流れない空間に僕がいていいのかと、不安はあったが裕の姿を見て、少し震えた手を見ると、これで良かったんだと言い聞かせるしかなかった。裕子のしょげた顔は、見たいものではなかったけど、それもこれでいいんだと、思うしかない。
僕らはカフェに入った。いたって普通の店で、僕がレモンティーを頼むと、裕子と裕はカフェオレを頼んでいた。こういう所が双児って感じ。
「話、あんだろ？」
裕は僕の方を向いていったけど、言ってるのは裕子に対してだ。裕子も僕を見て、なるべく裕を見ない様にしている。
「帰ってきなさいよ、いいかげんに。みんな心配してる」
「馬鹿にしてんのか？　誰も心配なんかしてねぇだろ。いい加減なこと言ってんじゃねぇよ」
裕子はついに僕から視線を外して、裕を見た。睨む眼は鋭く、裕を見てるようだった。二人から挟まれる僕は、目をそらしながらレモンティーを少しづつ飲んだ。
「何それ、あたしずっと本当に心配してたのよ。裕になにかあったらって。勝手に出て行くなんてひどいじゃない、自分勝手すぎるのよ。あんたもあたしも、親からは見放されてるけど、あたし達はいつまでも二人なんだから！　勝手に一人にしないでよ！」
裕子の叫びに、裕も裕子の方を見た。驚いている。そう言ってる。
「なんだよ、それ。一人にしたのはお前が先じゃないか、お前がオレより徹といるコトを選んだんだろ？　オレよりいい兄弟になるんじゃないか。それでいいだろ、オレのコトなんか放っとけばいいじゃん」

「放っとけないって言ってるじゃない！　ほんとやな子。頼むから、戻って来てよ。親なんか、ほっとけばいいじゃない。放っとけないなら、あたしと一緒に話しにいこう。話したら分かる親よ。裕もそれぐらい分かるでしょ？」

裕は再び僕を見た。僕の目に映る裕子を見た。

「わかるかよ、そんな親だって知ってたら、もっと早くそうしてる。あきらめてるんじゃない、あきれてるんだあの親たちに。それに、オレは徹に会いたくない」

「会いたくない？　どうして？」

「もう、うんざりだ。あいつに使われんのは。だからに決まってんだろ」

裕子の目に涙が浮かんだ時、裕の目にも似たものが浮かんだ。僕は何もいえないまま黙って、成り行きを見守っていたけど、いてもたってもいられない衝動に駆られていた。

「裕、はどうしたいの？　帰りたくないの？　このままじゃ、裕は壊れるから、話をしてほしかった。でも、裕の気持ちが見えないよ」

僕の言葉に、今ははっきりと僕の目を見た。裕子も僕を見る。

「お、オレは・・・家に帰りたいわけじゃない。唯、寂しい・・・だけ」

寂しい。裕の心がはっきりと現れた。僕の目を見て言うときに裕は別の場所に行っていた。うつろな瞳が、本当に何かを伝えようと必死になっていた。僕は裕を捕まえなければと、ついつい手をつかんでしまった。

驚いて見る裕の目が笑顔に変わる前に、誰かが大声を上げた。聞き覚えのある声の方に三人とも目を向けると、そこには徹がいた。

もはや偶然ではなく、必然な感じ。

２０、話し合い（後書き）

これで二十回目です。
前作にあたる『コイバナ』の２倍ですね。
一応、ここからが話の上では折り返し地点です。というのも、裕の話がおわったら恋愛話をかいていこうとおもってます。
主人公の恋も発展させていきます。

感想、批評などありましたらご遠慮なくいってください。
それでは、読んで下さってありがとうございました

21、解決

僕は席を外すべきか、そのままいるか迷った。っていうか、なんでいるんだ徹。

ちゃっかり、僕の隣に座った徹を僕は少し見上げてみた。裕と裕子は、今度は徹を睨みながら話を進めようとしている。これも、少し前に徹が女の子と一緒にここに入って来たのがはじまりだ。裕か裕子を見つけて、大声で名前を呼んだ徹から逃げ出したいと顔に描かれていた裕を僕が押さえ込み、裕子が徹を呼んだ。一緒に来ていた女の子はすぐに帰ったようだ。

それで、裕子が事情を説明しいまにいたる。もう、これは僕はいなくても大丈夫じゃないかな？

「水戸っち、逃げんなよ」

僕の心理を読んだ裕が鋭い目つきで僕に言った。小さく返事をすると、またレモンティーを飲みはじめた。

「裕、帰ってきなさい。帰ってくれば、寂しくなんかないわ」

「そうだ、寂しいなんて、オレらがいるだろ」

裕はうっとうしそうに舌打ちした。

「うっさいなぁ。だいたい・・・オレは徹に話したいコトがあんだよ」

「言えよ。なに？」

徹が真剣なまなざしを向けた。どこか作った顔をしているが、裕のコトを心配してるのは本当だろう。でも裕は視線を外して、ぼそりとつぶやいた。

「ここでは言えない」

「わかった、じゃぁ、家に帰ろう」

「そこでも言えるか！」

「じゃぁ、ここで言うしかないだろ。お前は何考えてんだ、親だって心配してんだから」

裕は目を見張った。
「嘘付け。あいつらがそんなコト思うか」
「本当だ。裕子も知ってるだろ？　母さんが探しに出てるところ。義父さんも、探してるよ」
「携番知ってるのに、連絡して来ないじゃん」
「してるよ、でも裕が全部拒否したんだろ」
裕は小さく、あっと声を出した。僕も前にケンちゃんから聞いたことがある。裕が家との連絡を絶つために携番とメルアドを消去したって。自分で忘れてちゃ世話ないよ。
「でも、学校から何の連絡もないし」
ここでは僕が口を挟んだ。
「学校しばらくきてないじゃん」
裕はついに言葉を詰まらせた。背中を小さくする裕をみて僕はため息をはいた。もう、僕はこの場に必要ないだろう。彼等は初めから僕がいなくても、結果を出すコトができた。僕がたまたまきっかけを作るコトになっただけだ。もう、必要はないはず。
僕は立ち上がると、お金だけを出して裕の背中をたたいた。裕の目が不安げに見て来て、裕子がどうしたの？って聞いた。
「帰るね」
それだけいうと僕は店を出た。僕を呼ぶ声が聞こえたけど、僕はそれを振払って走り出した。顔はいつも以上に笑っていた。

その夜のコトだった。
僕の部屋の窓に石があたる音が聞こえた。虫か何かがぶつかった音かと思って無視をしていたが、しつこく聞こえるので僕は窓を開けた。
「よぉ」
玄関近くに立っていたのは裕だった。僕は急いで下に降りて裕の所まで行った。裕はバイクに乗ってここまで来たようだ。あの日と同じバイクがあった。

「どしたの？　こんな時間に」
「お礼言いにきただけ、ほら、水戸っちサッサと行っちゃうからオレも裕子も何も言えなかったし」
そんなにたいそうなコトはしてないんだけど、ま、いいか。
「ありがとな、おかげで親と話し合ってみるコトにしたよ。帰るかどうかはそれから決めるけど、そのつもりで荷物は用意したし。いろいろ、まだあるけどどうにかしてみる。それで」
僕は次の言葉を出すのに時間をかける裕を待った。裕はうつむいて、僕を見て、またうつむいて、を繰り返していた。そんなに言いにくいことなら僕はいわなくていいと思うけど。でも待ってみたかった。
裕が次に僕の目を見たとき、決意というものが見えた。何かを決めたときの顔。

「オレ、たぶん水戸っちスキだわ。これ一応、恋ってことで」

じゃっ、と言って、裕はバイクにまたがって帰って行った。その姿を見ながら僕は突っ立ったままの体をどうにか動かそうとしていた。でも、動かない。
裕はなんて言ったんだろう？　聞こえてるけど、聞こえてないような。いや、そうじゃなくて聞こえていて、聞きたくない言葉だった。好きって言葉にはいろんな意味があるけど、僕は裕には友情としてはすごく好きだ。でも恋愛としては裕子が好きだ。裕は僕を恋として好きだと言った。
僕は初めて裕とであった頃と同じような恐ろしいほどのわらい声をあげていた。
こんな告白はじめてだ。

22、新たな恋

裕と仲なおりしたことは、学校に行くとすぐに知れ渡っていた。裕は久しぶりに学校にきていた。単位の方が心配になったが、ケンちゃんによるとまだまだ大丈夫だということで、僕は安心した。そうとはいえ、昨夜のコトが僕の頭の中でよぎると何もかもまっさらになる。

告白は告白でも、普通じゃない様に思える。これって差別になるかもしれないけど、男から男って僕は今まで聞いたことないし、僕には好きな人がいるし。頭抱えるよ、ほんと。

それも僕一人だけが頭を抱えていて、裕は昨夜のコトを気にもしてない様だった。

「おっはよっす！」

いつもの明るい笑顔であいさつするのを見て、どうにもこうにも困ってしまったが、僕も普通にするべきだと思って、あいさつを返した。

「水戸っち、あとで話聞いてよ。へっへー、いろいろ終わったからさ」

終わった？　その表現は正いのか。とにかく、裕を見てれば一目で分かるんだけど、うまくいったみたいだ。そう思うと、自然と顔がほころんでいく。少しでも僕がしたコトが正しかったっていわれてる気になって、ついつい。誰かに気がつかれない様に咳をしたり、口を引き締めて堪えた。

授業が終わると、裕はすぐに僕を連れ出した。

場所は、桜の散った場所。丁度そこには弁当を食べる人のためのベンチが置かれている。夏だし、ここで食べて行く人は多いんだろうなぁ。僕と裕はそこに腰を下ろした。裕はジャラジャラしたアクセ類をいじりながら、手にはここに来る前に買った珈琲牛乳がある。

真っ青な空を見上げながら、真っ白に光を放つ太陽もみた。

「まずは、そうだなぁ。家帰ったら、親父に殴られた。めっちゃいたかったけど、親父が泣く顔みたら目が覚めてきて、義母にも殴られたときには、オレって馬鹿だったなぁって気づかされた。まぁ、それから徹と裕子と家族で話して、オレは家に戻るコトにしたけど。やっぱこれは水戸っちのおかげだし。サンキューな」
いえいえ。照れながら返事をする。
「それで・・・昨日のコトなんだけど」
急に話を昨夜のコトにもっていかれて、僕は心臓が口から出るんじゃないかと思うぐらいに、驚いた。
「あの、あれは、まぁ」
裕が必死に何か伝えようとしてるのは、分かるけど僕は僕で何かの言葉を探していた。沈黙というか、裕のいつまでも言葉のでない必死さが僕らの中に流れた。
「裕」
体を振るわせて僕を見る。
「僕、裕子が好きなんだ」
裕は空を見上げて、ため息をはいた。そして、僕を見ると「しってる」と言った。
「わかってた。水戸っちは気づいてなかったけど、オレの目からはすぐに分かった」
それは、恋をしてるからこそだと、裕は付け足した。僕は少しずつ赤くなる頬を押さえながら、裕の言葉に耳を傾けていた。
「あれだな、えっと、オレは別に水戸っちの恋路を邪魔しようなんか思ってないから、それにオレは水戸っちといれれば・・・何も望む気はないし。っていい訳かな」
僕は首を振って、裕の気持ちを拒んだ。僕にはとても答えられないし、恋という気持ちを持つ裕といるのは、なんだか悪い気がした。裕は僕を想ってくれても、僕は裕子しか想えない。僕には複雑な恋ができないし、男とはとてもとても、恋愛するコトなど、できやしない。

臆病な僕は、唯裕の笑顔を信じた。裕が笑っているときは、友達でいるときだと思ったからだ。

期末テストが終わって、裕子の姿をまた廊下で見るコトが増えた。ただ、その姿は決して背中の丸まった彼女の姿ではなく、ピンと背中を張って、堂堂と歩く彼女の姿だった。その傍らにはいつも友達がいる。それを見ると僕の目がついつい細くなる。それは嬉しいからだ。

僕はその頃、もうすぐにくる高校最初の夏休みに心踊らされていた。カズト、ケンちゃん、薫、裕といっぱい遊びに行く計画をたてたし、夏は楽しいコトで一杯だ。そんなうきうきした僕を、テスト明けの休みの日に、裕とバーに行くコトになった。というのも、裕の給料を取りに行くだけだけで、僕はただの付きそいだ。

いつものようでいつもと同じメンバーじゃないバーに入ると、すぐにいくつもの声が聞こえる。それは全部裕に向けられたものだったけど、僕にも少しは向けられていた。

裕がマスターと話している間に、僕はカウンターに座って、マスターがいつもの様に僕に出す、味のしない飲み物を少しづつ口に入れていた。僕の所に、何人かやって来ては、離れ、やって来ては、離れてを繰り返し、ついに一人の女の子が僕に近付いて来た。見た目から、派手だ。

それでもって、すこし肌が黒い所が昔のコギャルを思い出させる。でも、メイクはそれほどきつくなく、僕はには素の顔に見えるぐらいナチュラルだった。でも、服装は短いスカートにたっかいヒールの靴。それでもってアクセ類をジャラジャラつけている。それにセミロングのまっすぐの髪は茶色だ。僕はある人物を思い浮かべていた。

「水戸っちだっけ？　あたしナミっていうんだけど、あんたと一緒に来た奴なんていうの？」

彼女はどかどかと僕の隣に座り込み、僕の顔を覗き込むように見

る。
「裕のこと？」
「裕って言んだ。ね、彼女とかいないの？」
「いないよ」
だって、僕のコトが好きといってるんだから。口には出さずにつぶやいた。彼女はしばらく口のはしを釣り上げて、何度も頷いた。この顔はどこかで見たコトがある気がする。
「ねぇ、好きな人とかはいないかな？」
心がすこし跳ね上がった。僕はなるべく悟られない様に顔を作って、彼女に言った。
「い、いるみたいだよ。ぼ、僕もその話はきいてないからよくしらないけど」
あ、そう。彼女の反応は急に静かになった。そのときになって、僕は彼女の見る目がどういったものか気がついた。
「ナミだっけ？　君もしかして、裕のコト気になるの？」
ナミは顔を少し赤らめて、僕から視線を外すとゆっくり頷いた。
「わかっちゃったか。ねぇ、水戸っち！」
彼女は僕の手をつかんだ。その力の入れ方に、僕は少し身を引いた。
「裕と仲いいんでしょ？　どうにかとりもってくれないかな？　あたし、マジだから」
あぁ、その強引さは誰よりも、裕に似てる感じ。僕は彼女の必死の瞳に自分を重ねていた。恋をする彼女の目と、僕の目はきっと似てる。それは誰もが持つ瞳で、その目は好きな人を狙って離しはしない。
僕は握られた手に手を重ねた。初めて会う女の子でこんなに楽に話せる子は初めてかもしれない。
「いいよ、僕に出来るコトがあればするよ」
僕は裕の気持ちを踏みにじっているかもしれないけど、ある意味では裕の為だとおもう。彼女とお互いに手を握りあうと、裕が帰っ

て来た。一体何が起きてるんだか、という不思議そうな顔で僕らを見てたけど、彼女は嬉しそうだった。僕も何故か嬉しかった。

23、花火大会

ナミのコトを話すとすれば、とにかく僕とウマが合うコト。まるで女版の裕だ。姿形は女の子のものでも、僕から見ると、彼女は中身は男っぽい所がある。僕が女の子と接するコトが少ないせいもあるだろうが、裕子とは違ったし、僕が付きあいやすい所からそうだといえるのだ。

それでもって、裕のコトがスキだと僕に言ってからすぐ、彼女はアタックを繰り返している。というのも、まずは友達になるコトだと言って、すぐに裕と打ち解けていた。それからも、何度も裕の所に来ている。

学校も終わって、僕らは夏休みを迎えた。ナミはしつこいほど裕にまとわりついている。僕はナミと一緒に裕の家に行くコトが多い。裕は快く迎えてくれるし、家の人も親切だ。僕にとっては裕子に会うための口実のひとつになっていた。

思ったより、裕の家は広々していて、僕は圧倒されていた。たぶん金持ちなんだろうな、と思いながら僕は緊張気味に家に入る。家の中に置物や、絵が飾られているなんて、僕には初めて見るような光景だ。僕の家では、考えられない。あっても、せいぜいパズルだろう。

「げぇ、ナミもいるのかよ。ま、いいや。はいれよ」

裕のあからさまな顔が冗談かどうか、掴みにくいと頃だがナミは気にしてはいないようだった。迎えてくれたのは、他にも裕子がいたし、裕の部屋の中には薫がいた。

「水戸っち、おひさ。元気してる?」

「うん、薫こそ・・・プールの監視いんやってるんだっけ?　結構焼けたね」

まだまだ。と薫は首を振った。

「これからどんどん焼くつもり、真っ黒になったオレを楽しみにし

てな」
僕は笑いながら返事をした。裕と裕子がお菓子とお茶を用意すると、ナミはすぐに裕のそばに寄った。裕は少し身をよじったが、さほど嫌な顔はしない。そして、僕はちゃっかり裕子を隣によんだ。
そうなると、自然に僕は裕子に話しかけていた。
「徹はいないの？」
裕が戻って来てから、僕は徹に会った事もないのに、話題を掘り出すためにそんなコトを聞いていた。
「いないよ。夏期講習行ってるの。いい大学いきたいんだってね、いっつもいないのよ」
そうなんだ。僕はだされた冷えたお茶に手をのばした。僕がそれを飲み終わると、薫が立ち上がった。裕との話が終わり、帰るところのようだ。飲み終えたコップをお盆の上に乗せて、僕は見送ろうとしたが薫がそれを止めた。
「じゃ、次は海に行く日まで。水戸っち、またライブ見に来てよ」
そう言って、手を振りながら部屋を出て行った。窓からもう一度、裕と一緒に手を振ると、薫も笑って振り返した。
「これから練習あるんだと」
裕が窓を閉めながら言った。僕はふーん、とだけ返事をして、元の場所に座った。と、ふと裕の机の上に置かれたチラシに目がいった。さっととり、僕が見るとナミも覗き込んで来た。
「花火大会」
僕とナミの声が重なった。それに反応した裕が変な笑いを浮かべた。そこには何かを企んでいると書かれている。
「行かねぇ？　オレ等で」
「それって、ここにいるメンバーでってコト？」
裕は頷き、僕の肩をたたいた。そしてぼそっと耳打ちする。
「オレにとっても、水戸っちにとってもいい方法だろ？」
そりゃ、僕にとっては裕子がいればそりゃラッキーだけど、なんだかなぁ。裕にとってはよくないんじゃないか、と考えてしまうし。

でも、これはナミにとってもいいコトだし。
僕が悩んでいるうちに、裕子とナミは簡単に答えていた。
「行く行く！　いつだっけ？　あさってじゃん！　ねぇ、水戸っちも行くでしょ？」
ナミが手をぎゅっと握った。その力の入れ方が、僕にどう返事をさせたいのか伝わってくる。僕はため息を吐き出し、裕を見ながら申し訳なさそうに、行くよ、と答えた。

心のどこかで、雨になればいいのに。なんてコトを考えていた。でも、見事な快晴で花火日和といえるほどの空だった。それも夜になっても何一つ変わらず、花火大会は開かれるコトとなった。
屋台が並ぶ街中を、ぞろぞろと浴衣を着た女の子やカップルがあるいて行く。僕はそんな人が通る中、ぽつんと待ち合わせの場所にいた。こんなにいっぱいの人が街の中にいるなんて不思議で見ていてあきないと思いながら、突っ立っていた。時々、クラスの子たちを見るコトもあったし、中学のときの同級生も見る。目が合っても話をするおとはないのだが、妙に恥ずかしくなり顔が熱くなる。
向こうとともかく、僕は一人きりで馬鹿みたいだ。
「水戸っちー！」
ナミの声だ。その方向に目をむけるとピンクの浴衣姿のナミが見えた。女の子って変わるんだなぁっと僕はしみじみ思った。ナミは別人とまではいかないが、浴衣姿がまぶしく見えるほど、女の子らしかった。おぼつかない足取りだったが、小走りに僕の方に向かってくると頃を見ると頬が緩む。
「おまたっせ。って、裕と裕子はまだ来てないの？」
「うん、僕が一番乗り。もう来てもいい頃だけど」
「だね。あ、あれじゃない？」
ナミが指差す方を見ると、僕と目を合わせて片手を挙げる裕と隣にいる裕子の姿が見えたけど、裕子も浴衣姿で僕はあまり直視でき

なかった。水色だ。裕子によく似合う色で、髪の毛をまとめている所が女らしさをかもし出している。いつもはしないメイクもしているみたいで、いつもより顔がくっきり見える。
　それでも、横に並んでいるとよくにてる。同じコトを思っていたのかナミが笑い出した。
「おっそーい」
「わりぃ、裕子が浴衣着るっていうから時間とった」
「ちょっと、人のせいにしないでよ。裕こそ、財布忘れたとか言って、なかなか家出られなかったんだから」
　いがみ合う二人をおさめながら、僕らは歩きはじめた。裕が花火の良く見える場所を知ってると言っていたのでそこまで歩く。もちろん、屋台にある食べ物も目的のひとつだ。
「水戸っち、水戸っち、焼き鳥食おうぜ」
　裕に半ば引きずられるように僕は焼き鳥を買った。それを食べ歩くと、裕子とナミがかき氷を買う。ナミは無理矢理に裕に一口食べさせていた。自然と僕と裕子がそれを笑い合う。
「ね、あの二人いい感じよね。このままばっくれる？」
　冗談まじりに裕子がいうのに、僕は敏感に反応してしまった。そんなこと簡単に口にされると困る。僕は僕の中ではその言葉はいい方に持っていこうとしてしまうんだから。
「ははっ、いいね。思いきってこのまま、今のうちにどっかいっちゃう？」
　今度は僕が聞いた。試してみたかった、裕子がどんな反応を返すのか。
　僕もただの冗談のつもりだった。裕子が僕に簡単に言ってしまう、どうでもいい存在としてみてるコトが無償に腹立たしくなったから。でも、僕の予想は裏切られた。裏切られたという言葉は必ずしも適切ではなかったかもしれない、彼女は前を歩く二人から隠れるように、足取りをゆっくりにしてそれから僕の手を引っ張った。
「水戸っちが悪いのよ」

裕子の言葉の意味を考える暇なんてなかった。僕は彼女が握っている、肌の触れあう場所に集中していた。真っ赤に火照る頬はもう前を歩いていた裕とナミのコト等無視していた。ただ、目の前にいる彼女だけを見ていた。

２４、最後の打ち上げ花火と僕の告白

予測不能ではあったけど、彼女がどういったコトを思って走り出したかは分かっている。決して僕の心を読みとってくれたわけじゃない。それなのに、僕の胸は恐ろしいほどに跳ね上がり、裕子につかまれた手は熱を帯びている。彼女が僕の方に顔を向けるたびに、僕の頬は真っ赤に染まっていく。おかしくなりそうだ。

彼女は立ち止まって、僕を屋台から離れた場所に連れて行った。

「ね、あの辺で休も」

彼女はブルーシートの敷かれた芝生の上に座った。僕はその隣に座る。

「えっへっへ。このままあの二人いい感じになっちゃえばいいのにね」

僕はただ笑って答えた。裕の気持ちを知っている分、簡単に喜べるもんじゃない。裕子は思いきり背伸びをすると、ため息をはいた。

「あたし、水戸っちにお礼いわなきゃって思ってたの。裕のコト、ちゃんと帰らせてくれてありがとう。あのままじゃ裕もあたし達家族もどうなってたかわかんないわ。徹もそう言ってたのよ。水戸っちのこと全然しらないのに、お礼言いに行くっていい出したときもあったわ。ふふっ、おかしいでしょ」

裕子は僕が見たコトのない、初めて見るような笑いを浮かべた。その顔には見覚えがある。裕子がしたんじゃなくて、他の人の顔が思い浮ぶ。

「お礼なんて、気にしなくていいのに。いい奴なんだね」

「そぉなのよ、本当にいい奴なの！　でも、あたしにとっては・・・」

その先の言葉を聞きたくなくて、僕は耳を塞ぎたくなった。でも、裕子はそれ以上何も言うことはなかった。僕はそれが気に触って、なに？と聞き返していた。望んでいない、聞こうともしていなかっ

たのに、声に出していた。
「なんでもないわ、気にしないで。あ、花火はじまるよ」
空を見上げると、真っ暗中にひと筋の光が現れる。それが飛翔すると天に打ち上げられた光は、大きな火花を散らしていく。その瞬間に僕も裕子も、大声をあげてその火花に向かって感嘆をあげる。何発も何発も打ち上げられ、色とりどりの花火が、僕らの顔を染めていく。
ふと横を見たときの彼女の横顔は、美しかった。真っ赤に染まる僕の頬と違って、彼女はほんのりとしたピンク色に染まっていた。僕は、こんなに好きになっていたことに気づいて口もとを釣り上げた。
「キレイね。あたし中一の時、お父さんにだまされて、たまやーって叫んだコトあるの。それを言うのが常識だって、教えられてたんだけど、あたし一人が恥かいちゃって、裕もお母さんも笑いっぱないし。だけどね、徹だけは笑わずに、一緒に叫んでくれたのよ。あれは嬉しかった」
たいそう嬉しそうに小さく笑う。それを見ていると、胸がズキっと音をたてた。
「徹は、いっつもかばってくれるのよ。あたしが悩んでるときも、すぐに話聞いてくれるしね。あ、水戸っちもそうよね。あたしの話、いっぱい聞いてくれるじゃない。あたし水戸っちは身内以外じゃ初めての話やすい友人かもしれないわ」
友人。僕は口の中でつぶやいた。その位置にいることが、僕とっていいコトなのかどうかは、そりゃ、よくないに決まっている。でも、彼女にとって僕の位置はそこ。友人という席に座るしかなかった。
「そう、ありがとう。僕も裕子は話やすいよ。というか、よく僕なんかの話をきいてくれるなぁって思うコトもあるし」
「なんかって？　僕なんかってなに？」
裕子がつっかかった。僕は裕子の凄みのある目に、吸い込まれて

しまうんじゃないかと思いつつ瞳を合わせていた。
「水戸っちは自分を低く見過ぎよ。人って自分が思ってるよりも、ずっとすごいもんなのよ。水戸っちには水戸っちのよさがあって、それが、僕なんかって言葉で済まされるようなもんじゃないってコト、あたし知ってるわ。もっと自信もちなよ。水戸っちは水戸っちでしょ？自分のコトそんなに責めないであげてよ」
裕子はそういうと、笑って花火を見た。
「キレイよね、そう思えるってことは大切じゃない。水戸っちは、あれぐらいキレいな心持ってるのよ・・・。ってくさいか」
裕子は顔を手で隠して、耳を真っ赤にさせていた。僕は眼鏡越しに映る花火の色に染められた自分の顔を、見られたくないと思った。僕は打ち上げられた花火以上に真っ赤になっているはずだ。
僕もその空気にたえきれなくなっていた。
「くさいよ。でも、ありがと」
僕は裕子の方は絶対に見なかった。背けた顔と反対の方向から、どういたしまして、という声が聞こえた。それで、僕は笑ってしまった。裕子もつられたという様に笑いはじめた。そうなると、花火にかき消されていく笑い声も、僕の中では勇気に変わっていた。
最後の花火が打ち上げられたときには、僕らの会話もそれなりに盛り上がっていた。テンションを上げ過ぎて、僕は裕子と同じように声を上げて連続して打ち上げられる花火を見ていた。歓喜の声が舞い上がる中で、終わった花火。ゆっくりと立ち去って行く人を見送りながら、最後の余韻を楽しむ人もいる。
僕と裕子も、しばらくの間座ったまま、話をした。
「おわっちゃったね」
「うん、キレイだった。でも、あっけないもんね」
裕子はちらほらと帰っていく人を見てから立ち上がった。
「花火って、失恋みたいじゃない？　好きになって、どんどん気持ちが高まってそれをぶつけて散っていく。なんだか、悲しいわね」
ふふっと、小さく笑った。ふと見えたその顔が、どこか遠くを見

ているようで恐くなる。どうしてそんな顔をするの？　と聞きたい。
僕も立ち上がって、裕子のとなりに立つ。
「裕子にとって、僕は友達？」
彼女は僕からの急な問いかけに首を傾げたが、すぐに「そうよ」と答えた。それが、どうにも気にいらなかった。僕は、彼女にとって友人でありたくない。そう思い初めていた。すっと伸びた腕は自然と、彼女の肩をつかんでいた。
こんな感情は初めてだ。僕がこんなに積極的だってコト、知らなかった。腕はそのまま彼女を引っ張り、僕の腕の中に招き入れていた。彼女が持つ甘い香りが、僕の鼻の奥を刺激した。
彼女が僕の腕の中でもがくのを全身で受け止める。僕は必死になって彼女を捕まえていた。そして、言ってしまった。もう、どうにでもなれっという気持ちが、僕にそうさせていた。
「友達はいやだよ」
それだけ言うと、僕は彼女を抱きしめていた力を緩めた。彼女はするりと、僕の腕から逃げ出て真っ赤な顔を手で隠しながら、僕の前に立ち尽くしていた。僕は一息おいてから、高まっている心を彼女にぶつけた。人に見られていようが、そんなコトはどうでも良かった。僕は彼女しか見えていない。
「好きだ、裕子が好きなんだ」
彼女が走り去って行ったのは、僕の言葉を聞いてからだった。
顔の火照りが冷めないまま、僕は彼女の姿を見ていた。足は震えて身動きすらできず、彼女の真っ赤な顔が目の前になるような気がした。

25、謝らないで

夏休みが終わっても、僕の心は熱くて冷めないままだった。あの告白は僕にとって、最初で最後の勇気だった気がした。とても今はあんなこと出来るような勇気はない。僕は弱い奴だから、そんなこと簡単にできた自分が恐ろしくも感じる。思い出すたびに、僕は真っ赤になってしまう。

あの日の僕はどうかしていた。あれから、裕の家に遊びに行くコトをしなくなった。裕子にどうやって顔をあわせたらいいのか分からなかったから、僕は家を出ようとしなかった。裕子の方も、僕に会おうとしてくれていなかった。僕は裕子に呼び出された場合いにだけ、裕の家にいこうとしてたけど、裕子からの連絡なんてなかった。それが悲しくなったときもあったけど、今は平気だ。

僕が家に行かない間に裕は僕の家に来る日が多くなった。裕に引っ張られて、出かける方が多かったけど僕の家にいる時は長い話を延々としているコトが多い。花火大会の後も裕は家にきて、ナミと一緒に僕の話を聞いていた。

「え、マジで！　告白したの？」

ナミのありえない、とでも言いたいような声が僕の眉根の皺を増やした。

「うん。返事、聞きに行けないから待ってるつもり」

「そう、そうなの」

ナミは僕がどうやって告白したのか、詳しく聞きたがったのでしかたなく話しだしたが、僕は裕の様子が気になってしょうがなかった。僕は裕に対して罪悪感というものを抱いていた。僕のしたコトは、間違っていないんだけど、裕の気持ちを知っているのに簡単に気持ちを踏みにじるコトをしている気がした。

裕の顔は無表情に近かった。なんにも僕に知らせようとしないで我慢している感じ。なのに、裕は泣いているように見えた。僕勘ち

がいでなかったら、裕を傷つけたんだろう。
その日以外の裕は僕に対して今までと変わらなかった。普通の友人同士だ。僕もそれを見て何の気づかいもしなかった。それで良かったんだと思う。

それが起こったのは、夏休み終わってから三日経った頃だった。裕子が僕の所に来たのは。
裕子は僕を屋上に呼び出した。屋上には鍵がかかっているけど、裕子には簡単に開けられる。裕子しか使えない場所ということは、誰も来ないってことで、僕らの話は誰にも聞かれない。
「ごめんね、クラスの人にいっぱい見られちゃったね」
裕子は金網に手を入れて、掴めるはずのないものを掴んだ。僕はただ彼女を見ている。見ているコトしかできない。
「水戸っちの・・・あの、気持ち・・・について、なんだけど」
裕子はためらいがちに言葉を選びながら、慎重に僕を見ないで言っていく。
「あ、ありがとう。すっごく、すっごく・・・嬉しかった。あんな告白はじめてだったから、びっくりしちゃったけど、嬉しかった」
言い終えてから、裕子はやっと僕を見て少し笑った。頬が桃色に染まっているのを見ると、僕の頬はリンゴのように真っ赤になった気がした。
だが、すぐに裕子の表情は硬くなり、顔はゆっくりとうつむいていく。僕は次の言葉が、僕のとどめを刺すコトになると、予感していた。外れるコトのない、絶対の予感。
「でも、駄目なの。あたしには・・・」
「わかってる！」
僕は思わず彼女の言葉を遮った。
「わかってる、知ってる。裕子が、僕を好きじゃないコトも。裕子に好きな人がいるコトも」
「そ、そう・・・。ごめんなさい」

ごめんなさい、その言葉が僕の胸を締め付ける。失恋っていうんだよね。でも、僕はあっさりとしたこの気持ちに首を傾げそうになる。最初から分かりきっていたからだろうか、花火のように上手く散ってはくれないけど、それほど失恋をしたという感じがもてないのは。

「あやまらないでよ、僕は裕子に困った顔をさせようとして、気持ちを伝えたんじゃないんだから」

裕子は苦く笑った。僕も笑った。

26、徹の本性

僕の心は砕け散ったわけではなかった。簡単にあきらめられる程の大きさではなくなっていた。僕の彼女に対する恋心は、天に打ち上げられた花火より大きかった。僕が僕の中で思っていたよりも、ずっとでかくて泣きたくなるようなものだった。

でも、僕は泣かなかった。いや、泣けなかった。僕はそれぐらい自分に冷静でいられた。

「それでも、ふられたのはふられたんでしょ？」

痛いコト言うよな。バーのカウンターの端に僕とナミが座って、なぜか今日は色のついた飲み物が目の前にある。この状況を作ったのは、素面のくせに酔っぱらっているナミのおかげだ。でも僕はこんな所に来るんじゃなくて、傷心の僕を励ます会を裕を含めた四人ではじめるはずだったけど、ナミが僕に話があるって強引に連れて来られてしまった。

僕としては、裕達と騒いでいたかったが、今となってはどっちだっていい。明日に変更になったことだしね。

「話って何？」

僕から話を持って来るのを待っていたかのように、ナミは話しだした。

「私も考えたんだ。水戸っちに便乗しようと思ってね。考えるだけじゃ、駄目だし、裕はどうしたって私を見る目はただの友達。またはそれ以下って感じ。だから告白するしかないって思った。振られる覚悟はあるよ。でもね、水戸っちと同じなんだ。やっぱり、それでも好きは続くと思う。それで何回でも、うざがられても、アタックするつもり。私が根性あるの知ってるっしょ？　出来ると思うんだ」

僕はふーんとだけ返した。彼女は必死にも見えた。僕に先越されたという思いすらそこにはあった。僕は無関心でそんな返事をした

んじゃなくて、僕も密かに持っているその部分を共感するように言っただけ。
僕はマスターのくれた飲み物に手を付けた。
「しんどいだけだよ。そんなの続けるのは」
「分かってる。だからね、しんどいときは話聞いてよ」
ナミは苦く笑った。僕は笑わずに素っ気なく聞こえるように分かったと返事を返した。僕はナミより一歩前にいるけど、立っている場所はそれほど変わっていない。彼女を振り向かせるコトなんて、僕にはとうてい無理なような気がする。彼女が誰が好きなのか、知らなければ良かったとさえ思える。
僕は飲み干すと、ナミを見る。
「応援は、今も変わらずしつづけるよ。でも、頑張り過ぎない方がいいと思う。うざがられない程度がんばれ」
がんばれ、こんなにも頼りない言葉を僕は彼女にぶつけたものだ。本来なら、がんばろうという所なのに僕は突き放すような応援をしている。どうしてだろう、僕がおかしい。
それに気づいていないのか、どうでもいいのかナミは喜んでいた。

帰りのコトだった。僕とナミはあれからマスターに無理矢理酒を飲まされ、バー内でばか騒ぎをしたあと酔いが冷めて来た頃に店を出た。それからも変な冗談を言って帰る道すがら僕は徹を見つけてしまった。
徹は僕なんかはよく知らない店から数人の友人と、肩を組む程仲のいい女子と一緒だった。あとからナミに聞いたところとてもぼっちゃんが行くような、健康的な店ではないらしい。まぁ、そこは僕にだってすぐに察しはついた。そして、裕がずっと前に言ってた言葉を思い出した。
徹の本性。
つまりは、そういうことだった。徹が二重の性格を使い分けているということだろう。彼は確かに、見る人にそうだと思わせるよう

な行動を取っている。何より、僕が腹立たしくなったのは、肩を組む女子と堂々とキスをしている所を見たからだ。
それが駄目なわけじゃない。徹の彼女かもしれないし、徹の中でそれが常識ならそれはそれで僕には関係ないコトだ。でも、今は裕子のコトが頭を巡っている。それが僕に腹を立たせるんだ。
ナミを引っ張って、僕は今見たものを振払うように駆け出した。なかったコトにはできないけど、僕の中に停めておけばいい。そう思った。

振られてからの第一日目。その日は近付いてくる文化祭の準備が一日の大半を締めくくった。
僕と裕子達のクラスが展示物を置く場所は近い。その為、僕は裕子と顔を合わせるコトが多かった。初めは顔をおもいっきり背けてしまったが、しだいに僕も裕子も話をする努力をし始めていた。ぎくしゃくするより、話す方が楽だ。
視聴覚室と会議室。隣同士の教室から出て、放課後にいのこり組になった僕と裕子は話をはじめた。
「水戸っちのクラスは何作ってるの？」
「ハリウッドの有名人達」
声を出して裕子が笑った。
「何それー！　スパイダーマンとか作ってるんだっけ？」
「そう、それがハリウッドの有名人」
裕子はわかったと口だけで言った。顔を見るとあまり納得していない様にも見える。
「裕子のとこは？」
「あたしんとこは、海の世界。っていうかニモの世界って感じ」
あのディズニーのやつね。っと僕が言うと彼女は笑って答えた。
「文化祭んときは見に来てね」
もちろん。裕子は僕の返事を聞くとすぐにうつむいた。僕は何度かこのときの裕子を見ている。だから裕子の気持ちが何となく分か

る。
「どうかしたの？」
僕が顔を覗き込むように聞くと、裕子は慌てて顔を背けた。その状態のまま裕子はなんでもない。と何度も言った。でも、僕は引き下がらなかった。
「なんでもないって、顔じゃないよ」
裕子ははっと僕を見た。それからまたうつむいた。そのまま沈黙が流れたが、僕は耐えきれず口をひらいた。
「話してよ。裕子は気を使ってるんだろうけど、かえってそれが駄目だと思うんだ。僕らって今は友達だろ？なら、話してくれてもいいじゃん」
裕子は困ったように眉根を寄せて、何も無い所を数秒見つめてからすぐに顔を上げた。決心した顔だ。
「大したコトじゃなのよ。ただ、知ってたし、分かってたけど、悲しくなっただけ」
何のコトか分からなかったけど、僕は真面目に聞いていた。
「好きな人が、女の子と一緒のとこ見るのってつらい・・・。みちゃったんだ、仲良く歩くとこ。でもね、いっつも違う子なの。それがあたしの勇気をとどめる。告白したらね、彼の周りにいる子と同じになる気がして、それが嫌で言えないの。ただ、それだけのこと」
ただ、それだけのこと。ではないんだろう。僕だって裕子が徹のコトを話すだけで胸がいたくなるのに、裕子は僕が昨日にみた徹を見たわけだから悲しくもなるんだろう。僕は彼女より幸せだった。でも、彼女よりしんどいものもある。彼女がいかに徹を好きか思い知らされるんだから。
僕から何か声をかける言葉はなく、二人一緒に悲しみを無言で分かち合っていた。それが不思議と、僕と彼女の距離を縮めたように感じたのは勘ちがいだったのだろうか。すっと伸びた手が彼女の手を掴んで、彼女もしばらくしてから力をこめた。何の意味のないものだけど、僕には十分だった。

最後、春がきて

文化祭はあっという間に過ぎて、どんどん時間は過ぎていった。
裕子と僕はあの日から、友達に戻っていた。それでいいのかと言われると、よくない気もするけど、これはこれでいいんだ。ナミが告白したコトも聞く。今度は僕が裕の相談相手になっていたけど、その後どうなったか聞いてない。
カズトのコトも薫も、ケンちゃんもいろいろあったみたいで、何度か僕らは集まって馬鹿みたいにさわいでた。でも、そんな時間も僕達にはあと少ししかなかった。
季節は巡って、僕らはもうすぐ一学年上に上がるコトになった。僕を含めて、留年してしまうかと思ったコトが何度もあったけど、みんな一緒に乗り切れた。その頃になると、僕らは出会った頃以上の絆を持っていた。それが、これから先にある現実を忘れさせてくれるコトもあったけど、僕を苦しめるコトもあった。
それに、僕は裕子のコトをあきらめきれるはずもなく、ずっと思い続けていた。ときには大胆な行動をとることもあったし、裕子に僕の気持ちを気づかせるコトも何度かあったと思う。でも、僕らは距離をとっていた。彼女が僕に近付いたコトもあったけど、僕が逃げた。その頃には、僕らはもう頭の上に大きなヨーヨーのような物を吊るしていた。どっちが先にそれを割ってしまうのか、僕は毎日スリルがあった。
「はぁ、クラス替えか。水戸っちは文系だっけ？」
「うん。裕は理系だっけ？　カズトとケンちゃんは一般かぁ」
「そうそう、薫も一般のはず。就職希望組だからなあいつら」
裕と僕は誰もいない教室の窓から、あの桜の木を見ていた。僕らは、二年になるとバラバラのクラスになる。それはこれからの未来を考えるとしょうがないコトだけど、寂しい。だからなのか、僕と裕は終業式の日に残っていた。

「カズトもケンも幸せだよなぁ」
そう、あの二人には彼女がいる。ケンちゃんは高校はいってからずっとつづいてるけど、カズトはどうにか思いが通じたらしい。薫も今はいい感じの人がいるって言ってたし、これからどうなるのか僕らは薫の報告を楽しみにしてる。
「裕は？　どうなの？」
裕の目は変わった。僕を見る目に以前のような妙な輝きが見当たらない。たぶん、僕のコトはただの友人、それ以上であっても恋という感情はないだろう。
「どうって？　どうもしないけど」
裕の顔が赤く見えたので、あえて追究しないでやった。
「水戸っちこそ、裕子のコトはもういいのかよ？」
いいわけないけど、僕はまだその時じゃないと思ってる。
「裕子は、待ってると思うけど」
それもしってる。もう、僕らは分かってしまってるから。
「いい加減素直になれよな」
その言葉も、僕の胸には十分承知してる。
「そう上手く、いかないよ」
僕が言うと、裕は笑った。そうだな。とだけ言った。

いつの間にか、あの桜の木に花が咲いていた。僕と裕子はもう一度その場所に立って、しばらくじっと桜を透して空を見上げていた。僕らはどちらからというわけでなく、いつの間にか手をつないでいた。
目を合わすと、二人一緒に笑いだした。
はちきれそうな風船は、僕のも裕子のものも見事にはちきれた。でも、僕らは新しい風船を作るコトにした、そうすることで僕らは新しい気持ちを見つけられる。
僕らは彼氏、彼女になった。
この空の下で。

最後、春がきて（後書き）

おわりです。
まだまだ、疑問が残る点もあるかとおもいますが、これで終わらせていただきます。
ヤンキー四人組の恋については、書くつもりはないですので、想像というか、考えてもらえると嬉しいです。
それでは、読んでいただいてありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0723a/

この空の下

2010年10月8日11時19分発行